

187
322

古今集詳解
三

中郎秋香著

古今集詳解

東京

崇文閣藏版

187-322



中邨秋香著

卷の三

古今集詳解

東京 文崇閣藏版



古今集詳解第三

中邨秋香講述
加藤きみ子筆記

古今和歌集卷第十一

戀歌一 萬葉集では男女の間をはじめ、親子兄弟朋友の相思ふ事をいふを、すべて相聞と題して部を分けました。戀と稱して男女の間ばかりのものを集めたりは、此古今集が始である。一體部門の上から言へば、雜の歌が多かるべき筈であるに、此集は雜は唯二卷で、戀が五卷であるといふは、別に仔細があるではない。戀にはよい歌が多かつた故である、と打聽に申された。借昔から古今の戀後撰の雜拾遺の四季というて、古今集は戀の歌に殊によいのであるといひ傳へた事である。

題しらす

よみ人しらす

郭公なくやさつきのあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉

是は序歌で、此序歌といふは、其時節の景物か、其他何事によらず、其時視聽又は心に感じたものについて、詞をおこして、其情をのぶるもので、此歌では時節の景物から詞をおこし、あやめ草といふから、あやめもしらすとか、つたのちや、郭公は五月専ら鳴く鳥故なくや五月といふ、此やは諷詠のやで、夕つく日さすや岡邊のやと同じで、疑のやではない、

五月五日は昔は菖蒲を葺きもし、纒ともした事故、五月の菖蒲草といふので、萬葉に、郭公さなく五月のあやめ草花橋に云々、又郭公さなく五月のあやめ草よもぎかづらさ云々などもみえて居る、あやめもしらぬの、あやめは分別といふ事で、分別もたぬといふ事をあやめもしらぬといふ、即ち遠鏡にいはれたムナヤといふ意ぢや、戀もするかなのもは歎息で、今マアといふ程の意、戀がマアせられることよナアといふ事ぢや、○郭公の鳴く五月の頃は、何となく人がなつかしいやうな心地がするものなるが、まして戀するわしは、軒に葺く菖蒲の、あやめ分別も立たずムナヤやたらに戀がマアせらるゝことよ、どうし

たらよからうといふのぢや、此郭公云々はあやめもしらぬといはんだめの序であるが、此序のうちにおのづから、此郭公の鳴く時節には何となく人がうらなつかしいものであるにまして、とやうの意がこもつて聞ゆるのぢや、こゝが序歌の妙なところで、これもかの枕詞の中にいひ盡されぬ餘情がこもると同じである、さて此歌は萬葉十に、郭公來鳴く五月の短夜もひとりしぬればあかしかねつも、拾遺六帖等には二の句をなくやとして入るといふ歌の調に似て古い歌と思はれ、これといふ事もなく、さらゝといひ下した處に、一向に思ひ入たさまが知られて、感が深いのである、此歌戀の部の始に出て居るといふから、まだ見もせず、聞も定めぬ人を思ふと、説き或は初戀のさまに解くなどの説は従はれない、あやめもしらぬ戀もするといふ詞にも、とよりさやうの意はみえねばである、借又此序歌といふもの、古い時代には多く行はれた體で、萬葉には澤山見えて居るが、是に格があるといふは、全く後世から見ていふ説で、もとより格などが有て、それに依つてよみ出したものではない、唯後世から多くを集めて分けて見れば、自然格のあるやうに見えるまでぢや、右

の如く格はもとよりのないが、しかし後世序歌というてよむやうに縁もゆかりもない架空の趣向を設けてよむといふではない。前に申す通り、其時の耳目に觸れるか、又は心に感じたものについて詞をおこすものぢや。其委しい事は、此戀の部には序歌が頗る多いから、其歌について成たけ細かにお話し申すやうに致すべきであるから、それで御心得がありがたい、此事は古人があまりくはしく申置かれぬからお話し申すのである。

素性法師

音にのみさくく白露よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし

噂に聞いたばかりで見ることさへも叶はねば夜は夜どほし安眠することも叶はず、晝は又思ひに堪へかねて死ぬべくさへ思はるゝ事よといふを聞くを菊にかけて、露の白露といふより、更に夜はおきてと露の置くを起きて居る事にかけて受け、露の縁語ひるを晝にかけて、思ひのひに、日をかねて、消ぬべしとこれも露の縁語で結んだのぢや。音にのみさくといふ句に見る事も叶はぬとい

ふ意がこもり随て見たならばせめて慰む事もあらんものといふ意が餘情にしられるのぢや。あへずはこらへられずぢや。

紀貫之

よしの川岩波たかく行水の早くぞ人を思ひそめてし

これも序歌ぢや、あれあの芳野川の岩に激して高く波をおこして流れゆく水のはやいことはマア、あの水のやうに早く前方からわしはあの人を思ひそめて、永い月日を送つて居るのに、今日までもまだ思ひがとにかぬ事よといふので、はやくぞ人を思ひそめてし、といふ言外に、今に其志の成らぬを歎じたる情がしられるので、こゝが面白いのぢや。

藤原勝臣

しら浪のあとなきかたにゆく船も風ぞたよりのしるべなりける

「白浪のあとなきは浪の上には目に見るべき道のないをいふ、ゆく船ものもはだにもの意で行く船でさへもといふのぢや。○白浪の上の之と見とむる

道もない方角に行く船でさへも、風といふものが便りとなり、媒灼となつて道しるべをするものであるのに、わしには媒灼となつて道しるべをするものが誰もないといふので、風を便のしるべなりけるとさらさらくと言ひすてたる餘情に媒灼のないを歎する意がおのづからしられるのぢや。

在原元方

音羽山おとに聞つゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

音羽山は逢坂山の西南で、逢坂の關より京の方は山科ぢや。音にはかり聞いて、逢ふ事なくて年來經過する事を地名によせてよんだので。〇よその噂にばかり聞きてまだ一度も逢ふといふ事なく年來にも成つた事かいな、といふを「音羽山おとにさくといひ、あはぬといふを逢坂の關のこなたといひなし」たがおもしろいのぢや。

立かへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしらなみ

立かへりは回顧の意、白浪の縁語ぢや。「よそにてもは、まだ逢ひもせぬよそ人なるのにの意でしは歎息ぢや。人は我が意中の人即ち戀人。心を沖津白波

は心をおくといふを沖津白波といふにかけて言ひおろしたので心をおくは其人の爲に何かと我が氣くばかりをするをいふ。〇うち返して顧み思へば、あはれにはかなくつまらぬ事である、まだ逢ひ見もせぬあかの他人であるのに其人の爲にわしが何かと氣くばりをするといふ事は、いふを沖津白波といひおろしたるより、其縁語で立かへりといふ詞をおいて打合せたのぢや。

貫之

世の中はかくこそ有けれふく風のめにみぬ人も戀しかりけり

世の中はかくこそありければ、尋常のことわりをもて推し難き世上の事を我が戀の情より歎じたので、見てこそはさもあるべきを見ぬ人を戀ふるをいふと正義に見えて居るがよろしい。吹風のは、目にみぬといふにかゝる枕詞ぢや。〇世の中といふものは、マアかういふもので有たかいな、ふく風のやうに目にみた事もなく、雁耳にさいたばかりで、そこでかうまで戀しく思ふ事よ、といふので、すべて世間の事は理窟どほりにはいかぬ事を、よの中はかくこそありけれと僅か二句の間にさらさらといひのべ、さて吹風のと枕詞をおち

三五二
て目にみぬ人もとうけたる調なだらかにて心ひるくまことに感が深い歌である。

右近のうまばのひをりのひむかひに立てたりける車の下す
だれより女のかほのほのかに見えければ讀みてつかはしける

在原業平朝臣

此詞書については天下第一の難義などいうて古來說多くそれについてひをりの日といふを近來の辭書などにも入れてあるが皆誤りでこれは伴信友翁がひこばえの説で明かになつた依て今はひこばえの説に従つてお話し申す
五月五日左近の馬場で騎射を行ふを左近の馬場の日といひ、六日右近の馬場で行ふを右近の馬場の日といふので即ち右近の馬場の日は五月六日の事で右近の馬場の場所は一條より大宮の方ぢやをりのひむかひは柵の日向ひで柵は埒で馬場で馬が横にそれぬ爲に垣やうのものを構へたる名其埒にそひて日のさす方に向ひて立てたる車が日向にたてたりける車ぢや下籠は車の中にかける帷幕の事日がさしてみたる故に車中の女の顔がほのか

にみえたのぢや

みずもあらずみもせぬ人の戀しくはあやなくけふやながめく
らさむ

見ぬでもなく又見たでもない人がかやうに戀しくあらうには折角物見に來た詮もなくらちもなくぼんやり今日一日をながめくらす事でもあらうかといふのでほのかといふ意を見ずもあらず見もせぬといひなしさてあやなくと受けたるかけ合せがいかにも妙におもしろいのである。

かへし

よみ人しらす

しるしらぬ何かあやなく分ていはむ思ひのみこそしるべなり
けれ

かけ歌のみずもあらず見もせぬといひあやなくといふ詞をおさへてとがめ返したのでかけ歌のみずもあらず見もせぬといふをうけてしるしらぬといふたぢや○しるのしらぬのと何としてからちもなく分別だてをしてい

ふことであらう 戀といふものは只思ひばかりこそは手引となるものぢや
のに、といふのぢや 贈答の歌は多くかやうに争ひかへすをならひとする事
でこれが興の深いのである

かすがののまつりにまかれりける所に物見に出たりける女
のもとに家をたづねてつかはせりける みるのたゞみね

春日野の祭は二月と十二月といづれも上の申の日に行はれる事じやが、是は二
月の祭の時の歌である 家をたづねて云々は後におくりやりたるのぢや、
かすかの、雪間を分ておひ出くる草のはつかに見えしきみは
も

これも序歌で、即ち其時の景物を序として、はづかに見しといふをおこしたの
ぢや 君はものは感歎辭で、此集雜のものとくちゆくわがさかりはもの
はもと同じく深く心をこめて歎ずる聲ぢや ○あれあの春日野の雪の間々
を分けてこゝかしこにはえだしてくる草のやうにはつく／＼にちよつと見
けた其君わいのマア其君わいの、といふので、是は勿論車の中にあらし人をい

ふのである さて此はもとといふに戀しいといふを含めたといふ説は取るに
足らぬ はもと深く心をこめて歎じたうちに戀しくもゆかしくもおぼつか
なくも思ひこみたる情がおのづからこもる事で、只戀しいとばかりさし定め
ていふではないのである、

人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとにの
ちによみてつかはしける づらゆき

花つみの事は春の部のところでお話し申した通り 但し此花つみといふ事
は、専ら女がしたる事と思はれる由、古人も申しおかれた「そこなりける人の
もとには花摘にゆきし女の父兄の類、其家族のもとにいひ送つたのぢや

山さくらかすみのまよりほのかにも見てし人こそこひしかり
けれ

これも序歌で霞隠れの山櫻をほのかに見るとか、つたのであるが、殆ど比喩
ともいふべくいかにも面白く手際にいひのべられた歌ぢや ○山櫻がうら
／＼とたなびいて居る霞のひまからうす／＼とみえるやうに、いかにもほの

かにさだかならず見たりし人がさ、マアさてもく戀しい事かいな、といふので、家集には下の句見しばかりにや戀しかるらんとあるが、今はかく改められたのぢや、何さま見てし人こそその方詞強くなりて一層おもしろく思はれるぢや、

題しらす

もとかた

たよりもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり
思は心の作用で、思と心とはもとより別の物ではないが、此歌では深く人を思ふよりして、心がそれに奪はれる事を、姑く別物のやうに言ひなして、文どつたのである。たよりはこゝでは人使の事にいふ、即ちこゝよりかしてへ物を送り届ける人使の事ぢや。〇わしが思ひは、もとより人使でもないのに不思議の事には、わしが心をば全くわの人の所へ持て往つてつけてしまつたわい、といふので思ひが切なる爲に心も心ならぬをかやうにいひなした。が面白いのぢや。此歌古來の解釋とかくむづかしくて要領が得がたい畢竟たよりといふをよく説き得ぬからの事である。

凡河内、躬恒

初雁のはつかに聲を聞しより中空にのみ物をおもふ哉

はつ雁のはつかに聲をといふを枕におき、さて雁といふからして中空と
うけたので、中空は中途半の事にもいへど、こゝは有頂天となるといふ程の意
に用ひたのぢや。〇空を飛んでゆく初雁の聲をはつゝに聞く如く、思ふ人
の聲を僅かにちよつと聞いてから、心が有頂天となり果てしまつた物思ひが
せらるゝ事かいな、といふので、はつかりのはつかにとさらゝいひ下し、さ
て雁の縁語中空云々とうけたる調ゆたかにいかにもおもしろい歌ぢや、

つらゆき

逢事は雲るはるかになる神の音にきよつゝこひわたるかな

「雲井はるかには逢ひみるべき事は手遠くて、まだいつとも見込のたゝぬをい
ふ。鳴神のおとにきくといふから、雲井はるかというたのぢや。〇かほどまで
に深く心を盡せども逢ひみるべき事は見込も立たず、雲井のよそともいふべ
く、手遠い事で、即ち雲井の遠方で鳴る雷のやうに音に聞くばかりで戀ひつゝ、

二五八
月日を過す事かいな、といふぢや、逢事はとかり、戀渡るかなと結んだ餘情、
に自然とか程に心を盡せどといふ意が生ずるのぢや、

よみ人しらす

む かつ糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉のをにせ

これは比喩の歌ぢや、片糸は縫り合せぬ糸の名、糸を縫るには、これと彼とを
よりかけて縫り合せるものぢやから、こなたかなたによりかけてで、それをど
うしたならば逢はれるかと、かうもしてみ、あゝもしてみる意にかけたぢや
玉のをは命といふ事、靈魂は命でつなぐものぢやから命を靈の緒といふ
但ししはしといふ事にも又長くといふにも玉のをといふ事があるがこゝは
命の事ぢや、玉をつなぐ緒にしようとして一本の糸をこちらとあちらとから
よりかけてみても、若し合はなかつた事なら、何をか玉をつなぐ緒にはせん
（わしが戀もこれと同じく）かうもして見、あゝもして見ても、若し逢ふ事が出来
なかつた事ならば、何として命がつながれやうぞ、忽ち戀死に、死ぬ事であら

うい

夕ぐれは雲のはたてに物ぞおもふあまつ空なる人をこふとて

はたては涯限の意、雲のはたては雲の涯限といふこと、心に思ふ事ある時は
みるともなしに雲の涯限の打まもらるゝをいふ、旗手といふ説はわるい
拾遺の吹風の雲のはたて、菅萬の雲のはたても色こきなど、皆涯限といふ事ぢ
や、天津空なる人とは我方ばかりで思を掛けてまだ逢も見ぬ人のこと、これ
を貴人ぢやといふ説は従はれない、さて雲のはたてといふから、雲は空のも
のぢやからあまつ空とつけたのぢや、○夕暮となれば雲の涯限をうちなが
めつゝ物が思はれる、といふはわしの方ばかりで思うて、先方では何とも思は
ぬ空な人を戀ふとしてさといふので、五の句奥義抄袖中抄などに、人戀ふる身
はとあるが、其方がまさるやうに思はれる、

かりごものおもひみだれてわかこふと妹しるらめや人しつけ
すは

「かりごもの」は枕詞、「しるらめや」はしらんやはで、知る事はあるまゝの意ぢや

○かはどまてにとやかくとかりてものやうに思ひ亂れてわしが戀ひ思うて
居るといふ事をば妹はしらう事があらうぞや人がさいうてさかさんからは
といふのぢや、

つれもなき人をやねたく白露のおくとはなけきぬとはしのは
ん

つれなしといふ詞は古來なさけなく心つよき意というてをるが今日云ふ同
情のないといふ意ぢや ねたくは口惜くいまゝしいといふ意の稍輕いも
ので轉じては未練といふやうな意にも用ひられる ことば即ち未練といふ
やうな意ぢや 同情のない人ならば思ひ切つてしまつて當然なのに未練ら
しく戀慕ふとの意ぢや 白露のはおくの枕 しのぶは思慕といふ事 ○あ
の同情なく心強い人を何としてかかやうに思ひも切らず未練らしく朝に晩
に平常起るとしては歎き思ひ臥すとは戀慕ふ事であらう思ひ切つてしまは
ないでとで 白露の云々の詞で例の朝となく晩となく平常になどいふ意が
おのづから言外にしられるぢや、

ちはやふるかものやしるのゆふだすき一日も君をかけぬ日は
なし

「ちはやふるは枕詞 かも社の顯註にはかみの社とあり其方よろしき由古人
も申された「ゆふだすきは木綿襦で、祠官が日々神供を奉る時かける物ぢや
から一日もかけぬ日なしといふにかけたので、これも序歌ぢや ○あの千早
ふるかもの社の祠官が毎日神供の時に用ふる木綿襦のやうに雨に嵐にいか
な日でもいかな日でも君を心にかけて思はぬ日はないことである」主意は
一日も君をの二句のみぢやが序のために風雨となく毎日毎日などいふ意が
おのづから知られるが妙ぢや、

わか戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれどもゆく方もなし

物思われば空に向ひて歎息するものぢやから戀が空に充滿すといふ大きな
言ひなしぢや おもひやるは普通にいふ推察の意ではない心をやるなど
いふと同じく漢字に遺情遺悶などかく遣で思ひをはらす意ぢや ○わしが
戀は虚空一ばいに充ち塞がつて居るらしい、どうぞして此思をはらしたいと

やらうとしても行きどころがないとみえて思ひがはれな

するかなる田子の浦浪たぬ日はあれども君をこひぬ日はな

○駿河の田子の浦は常に浪のあらい所ぢやがしかしたまには浦浪の立たぬ日もあるけれどもわしが君を戀ひぬ日とは只の一日もあることがない

ゆふつくひさすや岡べの松のはのいつともわかぬ戀もする哉

此歌普通本には夕つくよとあれども一本に夕つくひと有て其方がよいと先哲も多く言はれ實に其通りぢやから今は夕つくひとしてあげました 夕つくひは夕日の事 さすやのやは調詠のやといふ事前にお話し申しおいた岡は土の小高い處で、山とまでならぬもの 岡邊の松は朝日夕日などうけて殊に目に立つものぢやから序に取つたので夕方は物思ふ身は殊にながめ勝のもの故見る所の實景を直ちに序としたのぢや ひとつともわかぬは松の色は四季にわたりてかはる事のないをかりていつともいはず常に人を戀ふといふ序としたのぢや ○あれぬの夕日の影がさしてはえて見える岡邊の

松の葉の色は四季に渡つていつもかはることがないがわしも亦いつもかはることがない戀がマアせらるゝことよ、どうしたらよからう)

あし引の山水のこがくれてたきつ心をせきそかねつる

比喩の歌で「あし引のは枕詞 山水の木隠れては山麓の樹木におほはれたる下を流れゆく水で、それを人しれす思ふ戀の事によそへるのぢや たぎつはたぎり流るゝ事戀の情の切なるにいふ せきかぬるは防ぎ止めかねるで制止難きにいふ ○わしの戀の情の切なるは山麓樹木におほはれた下を流れ行く水のやうに人目には知られないが、たぎり流るゝ心のいきほひがつよくて、塞きとめやうとしても中々制しかねる事である」とぢや 俗此以下は多く忍ぶ戀の歌を列ねられたのぢや

吉野川岩きりとほし行水の音にはたてしこひはしぬとも

「岩切りとはしは、水勢の烈しいさまを形容していふ詞 岩に激してすさまじき音を發して流れゆくは實に岩を突きぬくともいふべきさまのあるものぢや これも序歌で、音にはたてしといふにあるぢや ○あの吉野川の水勢は

いかにも烈しく岩をつきぬくやうに流れて行く水は、すさまじい音を發する事ぢやが、わしが戀ふる心は吉野川の水勢のやうぢやが、しかし音に立て、人にしられるやうな事はせまい、よしとへ戀死に、死ぬ事があるとしても、とぢや、

たぎつせの中にも淀はありてふをなど我戀の淵瀬ともなき

「たぎつせは水のたぎり流るゝ瀬といふ事、淀は水の上よどみてゆるく流るゝところ、末句の淵瀬は川の縁語によりて戀の情の間断なく切なるをいふのみで、あながちに淵瀬の詞にかゝはるべきでない。○たぎり流るゝ川瀬の中にも淀というて、水の上よどみてゆるく流れるところもありといふ事なるに、何故にわしの戀には淵瀬の差別もなく、常に早瀬のやうに思ひたぎりて苦しくくらす事であらう、

も 山たかみしたゆく水のしたにのみ流れてこひんこひはしぬと

「山高みは山が高くといふ程の意で此みをさにとくは重すぎてよくない

「風寒み」瀬を早みの類、風が寒くて、「瀬が早くてぢや、但し、ふりみふらすみ、」なきみわらひみなどいふみはもしといふ程の意で、「ふりもしふらすもし、」泣きもし笑ひもしぢや、委しくは皇國文法釋義に申しておいたが、此みといふ辭を此歌について古人の説もあるから序ながら大畧お話し申すぢや、下ゆく水は下にくと流れゆく水といふこと、流れてこひむは流れにながらへをかけて、いつまでも此通りしのびくに戀ふべしといふので、これも序歌で、したにのみ流れてとかゝるのぢや、○山が高く、其山から下へくと流れゆく水のやうに、したにばかり即ち心の内ばかりで、いつまでも戀ひて居らう、たとへ戀死に、死ぬ事があるとしても、といふので、上の吉野川の歌と大要同じぢや、

思ひいづるときはの山のいはつゝじいはねはこそあれ戀しきものを

是も夏の部、思ひいづるときはの山の郭公といふ歌と同じく常盤木山の事で、山城の常盤山ではない、思ひいづる時といふを常盤の山といひかけ、さて

「岩つゝ」とうけて言はねばといふ詞をおこしたのぢや。○かの人の事を思ひ出した時は、常盤木山の四面縁の中に包まれた中にもえたつ如き岩つゝの色をみるやうに、口にこそ出してはいはねども、もゆるが如く戀しく思ふものをといふぢや。常盤の山のいはつゝとさらく、いうたうちに例のおのづから縁の中に紅をみるといふ如き餘韻を生ずるのぢや。

人しれず思へばくるしくれなるの末つむ花の色にいてなん
人しれずは、人にしられずぢや。人はわが思ひ人をいふ、紅の末つむ花は紅の花の事ぢや。紅の花は花の末を摘取て染料とするものぢやから、さやうにいふのぢや。さて此二句は色にいでなんといはんためにおいたのぢやが、何となく女の歌らしくしをらしいさまがみえる。紅の花をつむなど女のわざ故である。○人にしられまいとて心の中ではかり思うて居れば、苦しうてたまらない。此今つみとつて居る紅の花の人の目につく色のやうに、いつとちだしてしまはうか。

秋の野の尾花にまじり咲花のいろにや戀ひむあふよしをなみ

上の句は色にやといはん序ぢや。咲花は何の花といはず、すべて花は色のあるものぢやから、いうたので、尾花の中に交りて咲いて居る花は目立ち易いからいふのである。是も前の歌と同じく心の中ではかり思うて居んより、この意ぢや。○秋の野に立ちて居る尾花の中に交りて咲いて居る花のやうに、いふそわしは色にあらはしてあのお方に思ひの程を知らせうか、ハテかう心の中ではかり思うて居た分では、とても逢ふ事はできまいからといふぢや、わがその「梅のほつえに鶯のねになきぬべき戀もするかな

これも上はねになくといはん序ぢや。「ほつえは穂つ枝で高くあらはれたる上枝のこと」「ねになきぬべきは、聲にあらはしてなげくをいふ。○わしが園にある梅の木の高い枝で、あれあのやうに、鶯が鳴いて居るが、わしもあのやうに、聲にあらはしてなげきかけたい程の戀がマアせらるゝことよ、

あし引の山ほととぎすわがとや君にこみつゝいねかてにする
郭公に依て戀の情を述べたのぢや。人情はすべて當下に思ふ所に物を引きつけて思ふものぢやから、我が戀の情の切なるからして、郭公も戀の情あるも

のと思ひなしていうたぢや、あし引のは枕詞で、この枕詞の中にあのやうに夜通しなくがといふやうな意が例の知られるぢや、「わがごとや君にこひつゝは我が君に戀ふるが如く戀ふものがあつてといふ事。○物思ひで夜もねられず居ればあのやうに夜通し郭公がなくが、やはりわしが君を戀ふるやうに戀しく思ふ事があつて、ねがたくする事であるか」とぢや、いねがてはいねがたげでねむりがたいといふ事ぢや、

夏なればやどにふすぶるかやり火のいつまで我身下もえにせむ

夏なればは戀の二に秋なれば山とよむまでとある秋なればと同じく夏なればといふことで、即ち夏となればぢや、ふすぶるはもえたゝすしていふること、即ちしたもえぢや。○夏となれば家の前でいふしたく蚊いふし、即ち蚊やり火のやうに、いつがいつまでわしはから胸のうちではかり思ひをもやして居る事であらう、

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずそなりにけらし

も

御手洗川は加茂にあり、「みそぎは身膜にて、神に祈禱するには先其身をそぎ清めて、さて祈る故ぢや、祓除まつりにいふも身をそぎ清めてする故ぢや、戀の情をとげたいとて神に祈るが普通なるを、是は戀の情をやめたいとて神に祈つたといふのぢや、情のいかにも切なるからの故ぢや。○戀の情のなくなるやうにして給はれとて、御手洗川で身を清めて祈つたみそぎを、神は御聞といけなさらずサなつたらしいことよ、マア一向に戀の情がやまぬからとぢや、

あはれてふ事たになくはなにをかは戀のみだれのつかねをにせん

あはれは心に感じて聲にあらはれるもの、あゝといふも、あゝ戀しといふも、又はかやうな歌となつて顯はれるものも皆あはれといふ聲ぢや、「戀のみだれは、戀の情からいろく様々に思ひみだれること、「つかねをは、たばねる緒糸のことぢや。○あはれといふ聲になつて顯れるものでもないことであつ

たならば戀をする者は何を以てかいろくさまぐに亂れた心をたばねつ
かねる緒糸にする事ができやう此聲があるばかりで草や薪などの亂れたを
たばねからげるやうに心の亂れたをたばねからげる緒とする事が出来る
思ふにはしのふる事ぞまけにける色には出じとおもひしもの
を

思ふは戀ひ慕ふ情 しのふるはこらへ包むぢや ○戀人を戀ひ慕ふ情には、
こらへ包む事はとうくまけてしまふたわい どうしても様子にはあらず
すまいと思ふたけれどもさういかなかつた、

我戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそしらばしるらめ

人しるらめやは人がしる事あらうぞやあるまいといふ事 「しきたへのは枕
詞で例の毎夜我に親しむとやうの意がこもるのぢや ○わしが戀はかやう
に深く包み忍んでをるから誰も人のしる事はあるまい只此毎夜く我がし
てぬる枕ばかりがサもし知るならば知る事があらうもしれんのみぢや
淺ぢふのをのよしの原忍ぶとも人しるらめやいふ人なしに

淺ぢふのは枕詞 しの原まではしのふの詞をおこす序ぢや 「人しるらめや」
は前と同じぢやが前の人世間の人をさしこの歌の人は戀人をさす 一本
に妹しるらめやとありて其方がよいと古人もいはれた ○かやうに深く戀
慕うて居る情をつゝみ忍んで居るといふ事もわの人はしる事はあるまいさ
やうにいうて告げる人がないによつてぢや、
人しれぬおもひやなぞとあしがきのまぢかけれともあふよし
のなき

前の人しれず思へばくるしの人世間の人は戀人をいひ此人しれぬは世間の人にしら
れずぢや 即ち深く包み隠すのぢや 「なぞとは一本になぞもとあり又六帖
にはなにぞとあるいづれかの誤に相違ないなぞとではどうしてもわからぬ
「わしがきのは枕詞で例のかほどまでといふやうな意を含む ○世間の
人にしられず包み忍ぶ戀はマア何としたものぞかほどまでに目と鼻の先の
あし垣の極まぢかい間でありながら逢ふといふ譯にいかないのはマアよし
のなきはなき事よとの意を含めた調ぢや、

思ふともこふともあはん物なれやゆふてもたゆくとするした
ひも

二七二

下紐したひもとの解けるは、人に逢ふべき前兆まへしるしといふ諺ことわざが有つた事とみえる。下紐したひもとは衣ころもの下の紐ひもの事ぢや。れやニハ六種むくしゆの差別さべつあるが此物このものなれやは、物ものなるべしや、ではないのにの意ぢや。委まことしくは皇國くわうこく文法ぶんぽう釋義しやくぎに申まをしておいた。○思おもうたとて戀こひうたとて、どうしてあはれる物ものなるべしや、あはれるものではないのに、結むすぶてもだるい程ほどに、下紐したひもとが結むすんでも、解とける事ことよ、どうした事ことかぢや、これは女の歌をんなのうたと思おもはれる。

ぞ いて我を人などがめそ大ぶねのゆたのためたに物おもふころ

「いでは、いやさ」といふ程ほどの詞ことば古ふるくは、どうぞといふ程ほどの詞ことばなるが、轉まじて「いやさ」とやうの意いにつかはれたのぢや。大舟おほふねの枕詞まくらことば。ゆたのためたは、大舟おほふねの浮うびてゆらくとするによせて、うかりくして居ゐるさま、物思ものおもふ状さまぢや。○いやさ、わしを君きみたちさやうに怪あやしみ咎とがめて下くださるまい、わしは此頃このとき、大舟おほふねの浪なみにゆ

られて居るやうに、うかりくして物思ものおもをして居ゐるのぢや、からおのづと妙たぎにもみえるであらうといふぢや、いせの海うみにつりするあまのうけなれや心こころひとつをさだめかねつる

「うけなれやのれやは、六種むくしゆのれや中なかつればにやのれやで係かりのやぢや。心こころひとつは秋あきの部ぶのところというた通り、心こころの全部ぜんぶ即すなはちまるきりといふ程ほどの意いぢや。○わしが戀こひをする心こころは、伊勢いせの海うみで釣つをする時とき、海人うみづかが用もちふるうけでもあらうか、あちらこちらと浮うきたいように、心こころがまるきりとんと取とりめがつかぬ事ことである。

伊勢の海いせのうみのあまのつり繩つりなはうちはへてくるしとのみや思おもひわたらん

つり繩つりなはは、長ながき繩なはのところ、く枝糸えだいとをつけ、これに釣針つりばねをつけ、海うみの中なかへ遠とほく引ひのばしかけて置おきて、後のちに繩なはをたぐりよせ、釣つにかゝりたる魚うなをとるをいふ。今長繩いまながなはといふものぢやといふ。うちはへては、引延ひのびべる意い。釣繩つりなはは引延ひのびべは

りおきて、借たぐりよせるもの。それを、長き月日にかけて、物思ひ苦しむにかけたので、是も序歌ぢや。○あの伊勢の海で、蟹が釣繩をかける時、長く打はへてくるやうに、わが戀も長い月日打はへ間斷なく、苦しいとばかり常に思つて、日を送る事であらうか、さて、つまらぬ事よ。

涙川なになかみを尋ねけむ物おもふ時の我身なりけり

涙川は伊勢にある川の名。されども此歌では必伊勢にも限らず、唯涙川の名をかりたばかりぢや。○涙川の水源地はどこぢやかと、何として尋ねた事であらう、どこでもなかつた、全く物を思ふ時にわしが身の眼から流れでるものであつたといふので、之を張翥が河源に溯つた故事に依るといふ説は、例のむつかしく説きなすもので、従はれない。

は種しあれば岩にも松はおひにけり戀をしこひばあはざらめや

「戀をしこひばを、戀ひにしこひば、又は戀ひとし戀ひばと説くはよるしくない。又た此をを見てを渡らんぬれてを行かんのを」といふは論にも足らぬ説ぢや。

これらの説皆な上の戀といふを活詞と見たからのであるが、これは名詞ぢや。をば我れ主となりて物を客とする時の辭には物を主として我客たる時の辭。境を出づると境に出づるとの差別で、皇國文法にいふ通りぢや。「戀をしこひばは、賀の部のこゝらの年をあかすもある哉のをと同じく、戀を繼續して戀うたならばぢや。即ち出来にくいとて、やめてしまはないで繼續して戀ふのぢや。しはつよめの辭○種がサあれば、岩の上にはへ松が生えるものぢやわい、してみれば、いかに至難であらうとも、此戀をサ思ひといめず、繼續して戀うた事ならば、逢ふ事の出来ぬ事であらうかい、必ず出来るに相違ない、此歌は戀歌ではもとより論もないが、志を立つる上では、此意氣組でやりたいものである。

あさなく たつ河霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり
是も序歌ぢや、○あれあのやうに毎朝、河霧が空にうきたつが、わしも其やうに心が空にはかりいつも、浮きたつて、思ひがとんと落付かすある事であるわい、あるよなりけり。よは世の中といふ事ぢやけれど、至つて軽く、當

下の事をいふまでいひかへれば頃といふ位の事 一口にいへばある事であるといふまでぐらゐぢや

わすらるゝは忘れたいと思へど忘れないぢや あしたづは思ひ亂れといふにかゝる枕 節序なくを思ひ亂れてなくといふぢや ○ちよつとの間も忘られるといふ時がサないからしてあのあしたづのやうに節序もなく、亂拍子におもひ亂れてねばかりないて居る。

からころもひもゆふくれになるときはかへすゞぞ人はこひしき

唐衣はひもゆふにかゝる枕 紐結ふを日も夕にかけたぢや 衣には紐が有て解きも結びもするものぢや さて衣の縁語でかへすゞといふたぢや ○風がそゝる寒く唐ころもの紐をゆふ 其日も夕くれになる時分には常でもこひしいがことさら深くサあの人が戀しく思はれるからころもの枕のう

ち例の夕方風がひやゝかに吹き来るやうな一種いひ盡されん餘情がこもるぢや

よひくに枕さためむかたもなしいかねし夜か夢に見えなむ

枕さだめんは枕がおちつかぬといふので眠られぬ事 ねられぬ時は寝がへりなどをして枕がとんとおちつかぬもの物思ひが切なので眠ることがならず枕がおちつかぬのぢや かねたもなしはしやうがないといふ事即ち枕のおちつけやうがないとぢや いかねし夜か前かまだ思ひが今日程切なるに至らず眠る事が出来た時分思ひ人を夢にみた事を今日から願みていふので、どうしてねた時夢にみた事が出来たらう、といふのぢや 前かたは眠られた眠られたから夢に見たといはしないで、かやうにいひなしたところが面白いのぢや、○毎晩く物思ひの爲に、眠る事が出来ないで枕のおちつけかたがない、ぢやからせめて夢にでも見たいとおもふが、それさへ出来ぬどうして寝た晩ぢややらわの人を夢に見た事であらう、とぢや いろくみたる情をすらく

とよくいひのべてまことに感の深い歌ぢや。

戀しきに命をかふる者ならばしにはやすくぞあるべかりける
○此戀しいといふ情にもしも命を取替へられる事で有たならば死ぬといふ
ことは造作もなく出来る事であらう、けれども取替へられぬものぢやから、か
やうにくるしい思をするのぢや、

人の身もならはしものをあはずしていざこゝろみむこひやし
ぬると

是は思ひ人に逢ふ事が出来ぬを堪へがたく思ふからよんだものと見てさ
解くべきである。○人の身の思ひどほりはいかぬものも畢竟ならばかた
でどうもなるものといふものを かやうに逢はないで、とりや先づめして見
やう、其儘仔細なく居らるゝものか) 又はこらへられんで死に、死ぬる
ものかと、といふのぢや。人の身もは人の身はといふではなく、人の身の心
にまかせぬもの意ぢや、

しのぶればくるしきものを人しれずおもふてふこと誰にかた

らむ

○かやうに隠し忍んで人を戀うて居れば甚苦しいものを世間の人にしられ
ないやうに、か程までに戀思ふといふ事を誰にか話してさかせたいさうした
らすこしは心も慰まうに

こむ世にもはやなりなむむめのまへにつれなき人を昔と思は
む

こむ世のよは、おのがよ、のよで、時代といふこと、即ちやがて来るべき後年の
時代ぢや、來世といふではない。○むしろ來るべき後年の時代に、マア早くな
るやうにしてほしい、今この眼前に、かく同情がなく、心うい人をも、昔の事と思
はい、それですまう(つらくもなさげなくも思ふまいから)

つれもなき人をこふとて山彦のこたへするまで歎きつるかな
山彦はこたへのこと。○同情のないきづよい人を戀ひ慕ふとて、あの山彦即
ち木靈が聲に應じてこたへをする程の大聲をあげて歎息をした事であつた
かいナといふので、かやうに大げさにいふは其歎息の甚しいを示すためぢ

や、
ゆく水にかすかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり

「かすかくは、契沖の説 萬葉にも水の上に數かく如き我命とも有つて水の上に字を書けばすぐに消えるものぢやから、はかない事にいふ もと涅槃經のは無常念々不住、如雷光暴水幻炎亦如畫水隨畫隨合、といふから出た詞ぢやとある」はかなきは詮がなく、つまりらんといふ意 ○流れて行く水の上に文字を書くよりも、猶一層詮がなくつまりらないのは、こちを思はぬ人をこちばかりで思ふといふのであるわい、

人を思ふ心は我にあらねばや身のまどふだにしられざるらむ
是はうかれごゝろの事を、我にもあらぬ心といふから、それをあやなしていうた歌ぢや ○戀人を戀ひ思ふ心は、謂ゆる我にもあらぬ心でもある事か、我にもあらぬ心なら、我が心でないから、我身の戀ひ迷うて居るといふ事も何さま分別の立たない事であらう、

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路にあふ人のな
き

道はわゆみ續けて、足をといめすゆけば、遠方に至るもの 遠方に至れば、都近くとちがうて、知る人に逢ふ事なきに至る物ぢやから、それによせていうたので、「思ひやるは、其人の事を心に思ふなれども、やるといふ詞を道の上にかけて、たので、さかひは場所といふ程の事」まどふ夢路は、不知案内の道路に、とりとめもなく見る夢をたへていふのぢや ○絶えず續けて思ひやり、思ひやりする場所がだん／＼と遠方に成る事にならう あちらこちらとさすらへあるく夢路の途中で、人に逢ふといふ事がなくなつた、前方は時々あつたものぞとぢや、此人は戀人をさしていふのぢや、

夢のうちに逢見んことを頼みつゝくらせるよひはねんかたもなし

是は逢ふ事が出来ぬより、せめては夢にでも逢ふと見て心を慰めんとして、夢に見る事を願へど、それも叶はぬをいふのぢや、「くらせる宵は、晝の程より其

心掛へをして日を暮した晩はぢや「ねん方もなしは前の枕定めん方もなし」と同じで寝つきやうがないといふ事ねんは寝つくこと即ち眠るのぢや此方もなしといふを衣を返したり咒文を唱へたりする方法の事と説くはよろしくないさやうの方法をさすとならば方があるのではない是は左様の六かしい事ではないつまり眠らんと思ふ時は却つて眠られないものでそれをいつた丈ぢや○せめては夢のうちにも逢見て心を慰めたいと願うと日の暮れるを待ちうけて寝た晩には一向に寝つかれやうもない事よ、あゝあやにくに

戀ひしねとするわさならしうば玉のよるはすがらに夢に見えつゝ

「ぬば玉のは枕詞」これに仰の現在には逢ふ事もせでとやうの意がこもつて聞えるぢや「よるはすがらにはよもすがらと同じで夜通しといふこと」夢に見るは我心からする事ぢやけれど逢はぬを恨めしく思ふからしてそれを人も人のしわざのやうにかこちよせたのぢや○戀死に死んでしまへとする

しわざであるらしい(現在では逢ふといふ事もしないで毎晩々々夜は夜通し常に夢に見えくする事よ、

涙川まくら流るゝうきねには夢もさだかに見えずぞ有ける

涙川は前と同じく涙によせていうたのみ枕流るゝは枕につたひ流るゝをいふ枕が流れるといふではない流るゝは川の縁語ぢやうきねは浮寝に愛寝をかけたぢや旅泊即ち舟に泊り寝るを浮寝といふ又獨寝して物思ふを愛寝といふ涙に浮んで寝るといふではない此歌の上の句舊説は皆従はれない○物思ひに涙川が枕に流れる獨寝のうき寝には(熟睡する事がな

いから夢もはつきりと見るといふ事がサどうも出来ぬわい、

戀すれば我身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ影は朝影といふ事で萬葉に朝影に吾身はなりぬ玉かきるとも又朝影に吾身はなりぬ唐衣とも皆朝影とある朝日にうつる影は細長く瘦せてみえるものぢやから瘦せた事にいふを後に瘦せた事を打任せて影となるといふのぢや諸説影となるは瘦衰へる事ぢやとばかりいふてあるはくはしくな

い「ものからは」ものであるのに「といふ辭の事は春の部でいふた通りぢや
○戀をして物思をすれば、わしが身は其爲にやつれ瘦せて、とんと朝日にうつ
る影のやうに、瘦せ細つてしまふたわい。さればというて、あの戀しい人に附
添ひもせぬものであるのに、わけのたゝぬ事ぢや」

む か かり火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川にうきてもゆら

是は鶺鴒舟といふ事は歌の表にあらはれては居らぬが、鶺鴒舟に思ひよせて
よんだものぢや、「なぞもかくの」なぞは何ぞで疑ひ訝つて問ひかくる詞も
は歎辭 何故ぞマア斯の如くぢや、○鶺鴒舟にたく篝火でありもせぬわしが
身がなせマアこんな涙の川に浮いて思ひにもえる事であらう、といふので、
涙の川は即ち戀ひ思ふよりいつる涙をよせたのぢや、

り か かり火の影となる身のわびしきは流れて下にもゆるなりけ

是も鶺鴒舟の篝火によせたのぢや 影となるは戀の爲にやつれ瘦せた事前

と同じ それを篝火の水にうつる影にかけたのぢや 「流れては、水の流れる
と身の存生へるとをかけ 下にもゆるは篝火の影がうつりて水底にもえる
と心のうちに思ひこがれるとをかけたぢや 心のうちに思ひこがれるを、下
にもゆるといひならはしてをる ○篝火の水にうつる影 いや、戀にやつれ
て影となつたわしの身の、つらくつまらないのは、水の流れる底にもゆるやう
に戀死もせず世に存生へて心のうちに思ひもゆる事であるわい、

は や き 瀬 に みる め 生 ひ せば 我 袖 の 涙 の 川 に う ゑ ま し も の を

「は や き 瀬 は 早 瀬 で 即 ち 急 流 ぢ や 四 の 句 の 涙 の 川 と い ふ に 對 する も の で 即
ち 川 瀬 早 瀬 と い ふ は 思 が 切 で 涙 の 甚 し い を 思 は せ た ぢ や 「 みる め は 海 松 布
で 海 草 それ を 人 に 逢 見 る を みる め と い ふ か ら い ひ か け た の ぢ や ○ 急 流
の 河 瀬 に も 若 し みる め と い ふ も の が 生 える 事 で あ ら う な ら ば わ し が 袖 に た
ぎ り 流 れ る 涙 の 川 に う ゑ て 生 長 さ せ ん も の を みる め を 植 えた な ら ぬ 人 に
逢 ひ 見 る 事 も 出 来 や う か ら」

沖邊にもよらぬ玉藻の浪の上にみだれてのみや戀渡りなむ

「沖邊にもは沖にも邊にもで邊はへた即ち磯どちらとも定まらぬを云ふ 俗に海とも山ともつかずといふが沖邊にもよらぬぢや 玉藻は藻 戀渡るは常に戀思うて月日を過すこと 渡るといふはすべてこゝよりかしてへかけて渡ること 橋を渡る 川を渡る 鳴き渡るの類ぢや ○わしが戀は沖にもよらず邊にもよらぬ藻が中途半の浪の上にならうて戀に心もみだれてばかりかう長い月日をおくつてしまふのぢやらうか、

あしかものさわく入江の白浪のしらずや人をかくこみんとは 蘆鴨は蘆田鶴蘆蟹と同じく蘆の邊に多く居るからの名で即ち鴨ぢや 白浪のまではしらすといふにかゝる序で此序に例の戀の思に心さわぎておちつかぬといふやうな情がこもるのぢや しらすやのやは重き感歎の辭で「事であるマア」といふやうなる意知らぬ事であるマアぢや 此やは例が澤山ある 皇國文法釋義にくはしくあげてある ○あれあのやうに蘆鴨が多く群れて騒いで居て入江の浪が白くたつ其白浪のしらす事であるマア、あの人をこれ程までにも戀しく思はうとは、

人しれぬおもひを常にするかなるふじの山こそ我身なりけれ 人しれぬ思を常にする我が身といふをするがにかけたのぢや さて富士は火山ぢやが當時は烟も立たずなつた事故人知れぬ思のある事にいひならはしたのぢや ○世間の人におし隠してしられぬ戀の思を平常にして居るわしはあのするがの富士の山がサ即ちわしの身ぢやわい 富士の山は火山ぢやけれど火も烟もみえないで人しれずもえる山であるから、 とぶ鳥の聲も聞えぬおく山のふかき心を人はしらなむ

上の句は序 とぶ鳥の聲も聞えぬは即ち鳥も通はぬぢや 樹木に鳴かぬのみならず鳥も通はぬ深山ぢや 即ちいかにもヒツソリと物深いさまぢや○ 鳴く鳥は勿論空とぶ鳥の聲もせぬ即ち鳥も通はぬ程の奥山のいかにも奥深き心の程をわしが思ふ人はどうぞ知つて呉れるやうにしたい是程までとは知るまいから

逢阪のゆふつけ鳥もわかごとく人や戀しきねのみなくらむ

「ゆふつけ鳥は舊説に白鷄ぢやとも鷄の尾の白くて長いが木綿をつけたやう

ちやから、さやらの鳥をいふともいうてあるが、共に證據がないから信せられぬ。唯木綿をつけたる鳥といふ事と見る外はない。さてそれは鶏の事をいふので、雞の下に立田山にもいうてあれば、逢阪山立田山などというた事とみえる。是にも陰陽家の四境祭に雞に木綿を着けて四關に放つといふ説もあるが、慥でないから従はれぬ。故にとに角逢阪にはゆふつけ鳥といふものがある、それは鶏の事と心得る外はない。さて此歌では人に逢ふは大方夜の事ちやから此逢阪のゆふつけ鳥といふ詞のうちにおのづから人に逢ふべき夕方になればといふやうなる意を句はせたのちや。○あの逢阪のゆふつけ鳥即ち鶏も人に逢ふべき夕方時分になれば、わしのやうに人が戀しく思ふ事ではなからう、頻りに聲をあげて鳴く事である。

逢阪の關に流るゝいはし水いはて心に思ひこそすれ

上の句は序で、是に例の逢ふ事を防かれて住んで居るといふやうな意が句ふのちや。○逢阪の關所に流れて居る逢ふ事を塞かれて住んで居るが、岩清水のいはすそしらぬ様はして居るものゝ心にはこらへられぬ程にサ思

うて居る、

うき草のうへはしげれるふちなれや深き心をしる人のなき

「うき草は、萍ちや。萍が水面にあまねく生ひ茂つて居るから淵の深いのがみえぬといふにかけたのちや。○萍が水の上一ぱいにはびこり茂つて居る淵故でがなあらう。わしが深く戀ひ思ふといふを誰も知る人がないのは、といふので。或説にうき草のうへはしげれるといふに憂き事種が多き意をよせたといふが、それまでいもあるまいとおもはれる。

うちわびてよばよむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞおもふ

「よばはむはよばむといふ事、聲をあげてよぶちや。○深くはえなくつまらず思ふあまりに、せんかたなく大聲をあげて呼んだならば木靈の答をせぬ山はなからう必ず答へるだらうと思ふ、それちやのに人の應せぬはどうしたものでか。心がへするものにもが、かたこひはくるしき物と人にしらせむ。列子に公扈齊嬰の二人を扁鵲施術して心をとるかへたといふ事がある、それ

によりたりといふ 此時代漢土の故事に依る事多ければ心かへといふはそれ
 に依たものと見える「ものにもがはものにした事ぢやといふこと」「か
 たこひは我が方ばかりで思うて對の人は思はぬ戀といふことぢや ○心か
 へ即ち對の人と我がとの心をと替る事が出来るものならしたい事である
 さうしたならばこちらばかりで思ふ片戀といふものは甚だ苦しい物ぢや
 と人に承知させる事が出来やうものを
 よそにしてこふればくるしいれ紐のおなじこゝろにいざむす
 びてん

是は返歌らしいよそに見て戀しく思ふといふやうなかけ歌に對していうた
 もので彼の後撰集小町が昔のころもを我にかさなんといふかけ歌に對して
 遍昭がよをそむく昔の衣はたいひとへかさねばうとしいさふたりねんとい
 うた歌に似てをる 入紐は雌紐雄紐の二すぢを一つに結び合せたものゝ名
 之を漢字で同心結といふからおなじ心に結ぶといふのぢや くるしは糸の
 縁語ぢや ○他所にはなれて居て戀うてあれば甚苦しくこらへられんぢやか

らして入紐のやうにしよになつて同じ心にサア結びあふやうにしよ
 春たてばきゆる氷の残りなく君が心は我にとけなむ

○春が立つて来れば消えてしまふ氷のやうにすこしの残りもなく君が心は
 さつぱりとわしにうちとけて下さり

あけたてば蟬のをりはへ鳴きくらしよるは螢のもえこそ渡れ
 「をりはへはつつとゝいふ事日通しぢや ○夜が明けてくれば蟬のやうに朝
 から夕までつつと泣き通し夜となれば又螢のやうにおもひにもえて夜が明
 けるまで戀うて居る

夏蟲の身をいたづらになすことも一つ思ひによりてなりけり
 「夏蟲は飛蛾をいふ いたづらは死ぬること 當時死ぬる事をいたづらにな
 るといふは通語で有つた 一つ思ひによりてはひとつの思ひこみに依てと
 いふに火をいひかけたぢや 一なすこともものにわしも其通の意をこめたぢ
 や ○夏蟲が火を戀ひ慕うて其身を死にいたらしむるのも一つの思ひこみ方
 に依ての事であるわい(わしも其通り此戀の思火で死んでしまふ事であらう)

夕さればいとゞひがたき我袖に秋の露さへおきそはりつゝ

「いとゞひは一層といふ意、戀する情よりは常も袖はしめりがちなるに夕方は一層ぢや、いとゞひはひがたきにかゝる辭で夕さればいとゞ秋の露さへといふではない、又秋の露は正しく露の事ぢや、之を秋故の露として秋の哀に感じて出る涙とする説はよくない、情にさやうの種類は分れず随てこれは戀の涙かれは秋の涙といふ差別はないからぢや、○常もかわく事は無いが、夕方になれば一層かわき難いわしが袖に秋の夕露さへもおきそはり、おきそはりつゝする事よ、あゝどうしたらよからう、

いつとても戀ひしからずはあらねども秋の夕はあやしかりけり

「あやしかりけりはあやしきまで戀しい意即ち不思議に戀思ふぢや、○いつといふても、かの人の戀ひしくない時は無いけれど殊に其内にも秋の夕暮は不思議に戀しくてたまらぬわい、

秋の田のほにこそ人を戀ひざらめなどか心に忘れしもせむ

「ほにこそこのほは形にあらはるゝを云ふ、それを稻穂にかけて秋の田のほといふたぢや、さて此秋の田のの枕に廣く一般にといふやうな意が匂ふぢや、○秋の田の稻穂の形に打出してサ人を戀ふやうな事はせぬが何としてちよつとの間も心の内に忘れるやうな事があらうぞや、忘れる間はない、

秋の田の穂のうへをてらす稻妻の光のまにも我や忘るゝ

○あれあのやうに、秋の田の稻穂の上を照らす稻妻の影は、ピカリと光るとみるまもなく消えて誠に短い間ぢやが、其光の短いまにも、わしは君の事を忘れるかい、ちよつとも忘れない、

人めもる我かはあやな花すゝきなどかほに出て戀ひずしもあらむ

是は今までは人目を憚かりたりしが、思ひに堪へかねて今はあらはれて戀ひんと思ひなつたのぢや、人目もるゝは人目をはゝかりて忍ぶ事ぢや、花すゝきはほに出てにかゝる枕、これに今は一層のことといふやうな意が匂ふぢや、○人目をとやかくと憚るべきわしはい憚るべきでもないに、らちの無いこ

とよ花すゝきのやうに今はいつその事形にあらはして戀はう忍むで居らな
いで、

哉 あわ雪のたまればかてにくだけつゝわが物思ひのしげきころ

「あわ雪はあわくかろく泡沫の如き雪多く春にいふけれど冬にもいふものぢ
や」「たまればかてには「たまりかたげで泡雪が降りたまりかねて崩れおちる
をいふ 初二の句はくだけつゝといふ序 例の此うちにもふる雪につけても
戀しさがたへられぬとやうの意が句ふのぢや しげきも序の雪にいひきあ
ふのである、〇あれあのふりしきる泡雪がたまりかねてはくだけつゝくだけつ
するよ、わしもそのやうにくだけつくだけつして物思ひが至つて澤山ある時
分であるよ、とぢや 戀の方のくだけけは心を碎き惱ますことぢや、

におく山のすがの根しのぎふる雪のけぬとかいはむ戀のしげき

是も世に忍ぶ戀の歌と思はれる それは序のさまにおのづから句うてをる、

「すがのねはきは昔の根をうづむといふ程のこと 上句は序で例の人知られ
ぬといふ意がこもる 奥山は人の通はぬところ すがの根にふる雪は樹木
の雪のやうに目にたゝぬものぢやからだ 「けぬとかいはむは人にいひやら
んといふではない自らいふのぢや、今死ぬといひたい程ぢやといふ語氣ぢや
けぬは消え去ぬで消えうせること即ち死ぬぢや 雪といふから消ぬといふ
ぢや〇人も通はぬ奥山の昔の根を凌ぎ埋めてふる雪のやうにわしの戀は誰
もしらないが消えて死ぬともいひたいやうぢや 戀の思かいかにも甚しい
のでこれもしげきの詞が雪にいひき會ふのぢや、

古今和歌集卷第十二

戀歌二

題しらず

小野 小町

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらまし
を

○戀しいくと思ひながら寝たからぢやかして、あの人^{ひと}が夢に見えたでもあ
らう 其時^{そのとき}夢と知つた事^{こと}であらうなら、さめずとあるべきであつたにあ、
惜しいことをした、

うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき

うたゝねは少時^{すつかた}寝の略^{りやく}で、しばしまどろむこと 少時^{すつかた}はもと水^{みづ}の泡^{あわ}の空形^{うつかた}よ
り起つた名^なで、泡^{あわ}はしばしの間^まで消えるもの故^{ゆゑ}いふ由^{よし}は萬葉古義^{まんやふこぎ}にみえて居
る「うたゝ」うたてなど、は全^{まこと}くちがふ辭^{ことば}ぢや 委^{まこと}しくは秋香雜考^{あきかざらう}に申^{まを}して
ある。○假初^{かりまは}にちよつと眠^ねつたうたゝねの夢^{ゆめ}に戀^{こひ}しく思^{おも}ふ人^{ひと}を夢^{ゆめ}に見^みた事^{こと}が

あつてから後は夢ははかない物ぢやけれど、其はかない夢といふ物をば頼も
しいものぢやと信じはじめたわい、

いとせめて戀しき時はうば玉のよるの衣をかへしてぞぬき

是は夜る着て寝る衣を裏かへして臥す時は、わが思ふ人を夢に見るといふ話
あるに依て、よんだもので、「いとせめてのせめてはせまりてといふこと、今
いふせめてではない、最切迫してぢや、うばたまのは枕詞で例のせめて夢に
なりとみたいとてとやうの意がこもるぢや、〇最さし迫りて人を戀しく思ふ
時には、せめて夢にでも見る事があらうかとよる着てぬる着物を裏かへしに
してサ寝ることぢや、

索性法師

秋風の身に寒ければつれもなき人をぞたのむくる、夜ごとに

〇秋風が肌寒く吹いてくるからして戀の情はますます増つて、同情のない人
（ぢや）から來る事はあるまいと思ひながらも、やはり其人をサもしくる事が
あらうかと頼み思はれるよ、毎晩く、といふので、つれもなき人をぞの語

氣中つれなき人故くる事はあるまいとはしりながら猶やはり、といふやうな
意味がこもるぢや、諸註とき盡さない所がある、

しもついつもでらに人のわざしける日しんせい法師のだ
うしにていへりけることばを歌によみてをのゝこまぢが
もとに遣しける
あべのきよゆきの朝臣

下つ出雲寺といふ寺で、或る人が追善の法事を營んだ日に、眞濟法師といふが
導師で説教した時にいうた經文の詞を取て、歌に詠んで小野の小町のところ
へ云うてやつたのぢや、

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬ目の涙なりけり

上の句は經文に依ていふたので、法華經五百弟子品に、或る人が親友の家で
酒を飲んで酔臥して居る間に、其親友が其人の一生安樂に世を送らん爲に無
價の寶珠を着服の中に繋けて與へて去つたといふ事がある、それをいふたぢ
や、是は此説教を濟行も小町も共に其法事の席に居て聽聞した故、それに依
つたのぢや、人を見ぬ目は人に逢ひ見ぬといふ事で、目に見ぬといふのでは

ない、○眞濟の説教では玉を衣に入れたというたがどのやうに包まうとして
も袖にたまらない白玉がある それは人に逢見の事が叶はないから悲しく
てこぼれ落ちる涙であるわい

かへし

こまち

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたきつせなれば

「おろかはすべてまだしく浅はかなこと賢愚の愚の事ではない、こゝでは志の
浅い事にいふ、○心の浅いおろそかな涙ぢやから袖に玉をころがすぐらゐ
に落ちるのであるわしの思は至極甚しいから涙も防ぎとゞめる事が叶は
ず流の流れのやうであるから包むどころの事ではない」

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

藤原としゆきの朝臣

戀侘びてうちぬる中にゆきかよふ夢のたゞちはうつゝならな
む

「うちぬるのうちは副詞で、寝る即ちぬいること 「たゞちは直徑で直な徑とい
ふこと 直な徑は曲つた道より早く達するものぢやから、ちか道といふやう

な意味にも用ひられ、轉じては副詞となつて、すぐそこで「といふやうな意味に
も用ひられるのぢや、○戀ひつかれて、しばしぬいる間に通行する夢にての人
に逢ふ近道はどうぞ之を現在にはしい、さうしたなら、此道を通行してすぐに
人に逢はうものをとちや、此うちぬる中の中を思ふ中と説くはわるい、どう
してもさうは聞えぬ、ぬいる程といふ意ぢや、

住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人めよくらん

初二の句は、よるといふにかゝる序 是に例の波のよせるやうに、たえずしば
く通ふやうな意が句ふ 又此時代男女一所に集るを住むといふたのぢや
から、すみのえといふに何となくさる意もひいて面白ぢや 「よるさへは
夜の夢ぢにさへといふ意 人目を忍ぶ中故晝は人目を憚れど、夜のしかも夢
路には憚るにも及ばざるべきを、それにさへとの意ぢや ○住の江の岸にた
えまなくしばくよる波の其よる眠りてみる夢の通路にさへも、何故人目を
よけると見ることであらう、夢では咎める人もあるまいのに

をのよしき

わが戀はみやまがくれの草なれやしげさまされどしる人のなき

○わしが戀は深い山奥にかくれてはえた草でがなあらうかして、段々と情が増して茂くなつて行けど、誰一人としてさうとは知らないは、

紀 友 則

宵のまもはかなくみゆる夏虫にまどひまされる戀もするかな
夏虫は、戀一にあると同じで飛蛾の事。宵のまもはかなくとは、此時代飛蛾の事に言うた詞と思はれる。飛蛾が燈を點するや否、すぐにより来て、火を求めて身を殺し、一夜の命をもたぬを、宵のまもはかかないといひならはした事と思はれる。此歌のさまで思ふにどうもさう考へられる、さもなくてはあまりに詞を省きすぎて聞えぬからちや、○宵のまの命もたすはかなく死ぬる夏虫は、實にはかかないものちやが、わしはそれにもまさつて戀にまよつて死にさうになつた事よなア、

夕されば螢よりけにもゆれども光みねばや人のつれなき

「け」は殊にで、それにもますこと、○夕となれば螢よりもまさりて、戀の思ひにもえこがれるけれども、其光が見えぬからでもあらうか、わしの思ふ人は、相かはらず同情をよせてくれないは、

さゝの葉におく霜よりもひとりねるわが衣手ぞさえまさりける

○笹の葉におく霜は、殊にさゆるものであるが、其霜よりも猶更に一人で寝るわしが、霜はさえまさつて、寒くてねられぬことであるわい、

わが宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ戀しかりける

上の句は序で、例のつくくと庭の霜にやつれた菊をながめて詠歎したやうなさまが、句ふのちや「きえかへり」のかへりは、わきかへり、死にかへり、などいふと同じで、其事を甚しくいふ詞ちや、○わしがうちの菊の咲いてゐる垣ねにあれあのやうに、白々と霜がおいて居る、あの霜のきえるやうにわしは消入つて死んでしまひさうに、サあの人が戀しいわい、

河の瀬になびく玉藻のみがくれて人にしられぬ戀もするかな

三〇四
「みかくれては、水に隠れてぢや、水隠のみと同じぢや、〇河の瀬の底で、水の流
れにしたがうて、打靡く藻のやうに、水に隠れて、人にはしられないやうな戀を
わしはして居る事かいなア、といふで、玉藻は藻の事、人は戀人とも云ひ、又
一般の人とも云ふ説があるが、どちらでも聞える、

かきくらしふる白雪の下ぎえに消えて物思ふ頃にもある哉
みふのたぐみね

初二句は「下ぎえ」にの序で、是もおのづから見る所の景物についていうたもの
らしく思はれる。「したぎえは、雪の下からとけてゆくを、人にしらす心の内
に死にさうにまで深く思ふにかけていふのぢや、〇まづくらになりて降し
きる白雪が、われあのやうに下ぎえに、下からとけてゆく、わしも下ぎえに心
のうちに消え入り、死ぬばかりに物を思ひつゝ、戀ひこがれる時節でもある事
かいなア、

君こふる涙のところにみちぬればみをつくしとぞ我はなりける
藤原興風

「みをつくしは水脈つ串といふこと、水中に立てある杵で、水の淺深の目標と
なるもの、落標とかく、それを身を盡すといふにかけていふたぢや、〇君
を戀ひ侘びて、落ちる涙が寢床にみちぬれて、其中につかつて、わしは居る
事ぢやから、恰も落標が水中に立て居るやうなものであるわい、といふので
其うちに戀に身を盡すといふ意をも含めたのぢや、

しぬる命いきもやするところみに玉のをばかりあはむとい
はなむ

「いきもやするは、もし生きる事があらずかもしれぬ、といふ事、戀ひつかれて
もはや死ぬより外はない境からいふ詞ぢや、玉のをばかりの玉のをは、こゝ
ではしはしの意で、ちよつとのまといふ程の事ぢや、〇今は死ぬより外はな
いやうになつた此命が、もしや生きる事があらずかもしれぬ爲に鹽梅見即ち試
に、鳥渡の間丈もあはらといつて下さいよ、さうしたならば、どちらとかわから
うから、

侘ぬればしひて忘れんと思へども夢てふものぞ人だのめなる

「人たのめは、人頼ませで さうなりさうに思はせて事實さうならぬ事 俗に
 人だまかしといふやうな意ぢや ○はえなくつまらぬから、無理に忘れてし
 まはうと思ふけれども、夢といふ物が人を見せて忘れられぬ種となる、さてさ
 て人だまかしなものである、といふので 「夢てふ物は夢で人を見るから、それ
 が種になつて忘れられぬ、といふを、人たのめといふまでぢや 夢で逢ふと見て、
 それが祥となるかと信じて、といふまでの重い意ではない 「人たのめは軽く
 みるがよいと、古人の説があるが、それがよろしい、

わりなくもねてもさめても戀しきか心をいつちやらばわすれ
 む
 よみ人しらず

「わりなくは、ことわりなくで、無證矢鱈といふ意 ○無證矢鱈と寝ても戀しく、
 覺ても又戀しくてどうもたまらぬ心はどこへやつた事ならば、忘れる事がで
 きるであらう、

戀しきに侘びてたましひ惑ひなばむなしきからの名にやのこ

らむ

此歌はこゝろに表と裏が有るが古來の解釋がまだ十分でないから、少し委し
 く御話し申さう 「たましひが惑ふといふは死ぬといふ事ぢや 「むなしきか
 らは表では空しき故で、からは身體 裏では空しき故で、からは心から、我から
 などいふからで、うつけ人ぢやからといふこと 名は即ち何の某で、自身の名
 の事ぢや 人の身から魂がぬけ出で、しまへば體は空物となるから、其空物
 の身體が何の某といふ名に残るであらうといふが表で さて裏に戀に侘び
 て死なばつまらん人ぢやからといふが、わしの名に残るであらうといふをか
 けたぢや ○戀しいのに侘び悲しんで、つひに魂が惑ひぬけ出で、しまつたな
 らば、空物の身體がわしの名のもとに残るであらううつけものゝ名が残るで
 あらう、といふのぢや、

紀ノ貫之

君戀ふる涙しなくは唐衣むねのあたりは色もえなまし
 「色もえなましは、色にもゆるなるべしで、色は火の色ぢや 火といはんでもか

くいへば、火の色にもゆるといふ事になるぢや。今ももえたつやうな色など
もいふと同じぢや。○君を戀ふるが爲に落る涙がサなかつたなら、わしが着
て居る衣物の胸の邊は、火の色にもえてしまふ事ぢやらう。涙が落ちて消すに
依てもえずとをる事であるといふので、涙の甚しいと胸の思ひの盛なをい
うて戀の情の深いを示したのぢや。

題しらず

よとともに流れてぞゆく涙川冬も氷らぬみなわなりけり

世とともに「は絶えず始終」といふこと。それに夜と共にをかけたのぢや
「流れてぞゆくは家集にながれてぞふる」とある方がよいと、柱園翁がいはれた
が其通りぢや。さて流れて泣かれをかけたぢや。「みなわは水沫で早瀬には
水の沫のたつものぢやから涙の盛なるをいうたので、水といふべきを字が足
らんからいふといふ説はよくないと、これも桂園の説がよるしい。○絶えず
始終にながれくして月日を渡る事である。わしが此涙川は、川は冬氷るもの
ぢやが、冬もちよつとも氷るといふ事のない、水沫のたぎる早瀬であるわい。

ぬ 夢路にも露やおくらんよもすがらかよへる袖のひぢてかわか

涙といはで涙をいふたものぢや。夢路にもものにもは現在に對して云ふ。現
在の夜道には露にぬれるものぢやが、夢路にもまたやはりといふ意ぢや。「よ
もすがら」は夜通しですがらといふはすべてこれより彼まで通ふ事。「道すが
ら」は此場所より彼の場所までの事夜もすがら、夜すがらは宵より曉までの事
ぢや。「ひぢて乾かぬは乾かぬ事かな」といふ歎息を含む詞。委しくは皇國文
法釋義合蕃の部にいうてある。○夢の道にも、やはり現在の夜道のやうに露
がおくものであらうか。夜一夜の間思ふ人の所へかよふと見た袖が、びつし
よりとぬれて乾かない事であるよマア、といふので、涙といふ事を言外にしら
せたのぢや。

そせい法師

はかなくて夢にも人を見つるよはあしたの床ぞおきうかりけ

「はかなくてほこ、ではわづかにちよつとばかりといふこと、あしたの床は、朝の寢床ぢや。〇僅かにちよつとばかりでも思ふ人を夢に見た夜は朝の寢どこをサどうも起て出にくく惜しくおもはれるわい、

藤原たふふさ

いづはりの涙なりせば唐衣しのびに袖はしぼらざらまし

これはかけ歌が有てそれに應じてよんだものらしい。それでなくては偽の涙といふが十分には聞えない。〇もし泣くまねをするまで、眞實より出る涙でない事ならば此わしが着て居る衣物の袖を人に知られまいとて、かく内々でしぼつて居る事はあるまい事ぢや、

大江千里

ねになきてひぢにしかとも春雨にぬれにし袖とはこたへむ

〇聲に立てるまで甚しく泣いて、びつしよりとぬれたことぢやけれどもし人が怪んで問ふたなら春雨にぬれた袖ぢやと答へておかう、

としゆきの朝臣

わがごとく物や悲しき郭公時ぞともなくよたゝなくらん

「時ぞともなくのぞは指す辭、いつを其なくべき時ともなく頻りになくこと時ともなくといふより重い辭ぢや、よたゝは夜直にて夜ひとよのこと〇わしと同じやうに物の悲しい事があるかして、あの郭公は、いつを其なく時ともいはず、夜ひと夜しきりになく事であらう、

つらゆき

さつき山梢を高みほとゝぎすなくね空なる戀もするかな

さつき山は五月山といふ事、彌生山の例で夏山といふとは差別がある。「なぐね空なるの空は我を忘れて夢中なること、心もそら足もそらの空と同じく人の見る目も忘れて歎くの類がなくね空ぢや、上の句は序で、これも打ながめた様が匂ふぢや。〇あれあの五月山の縁に生茂つてをる梢が高く、其茂みになく郭公の聲が空に聞えるが、其なくね空というやうに人の見る目も忘れて、泣き歎くまでの戀がせられる事かいな、

凡河内躬恒

秋霧のはるゝ時なき心にはたちゐの空もおもほえなくに

秋霧は枕詞 たちゐの空は其縁語で空は前の空と同じく我を忘れて夢中のこと 身の取まはしも覺えず夢中なのがたち居の空も覺えぬぢや 「なくに」は打消の重いぬににが添うたので自然と「ないのに」といふ様な意が生ずるぢや から此歌もおもほえないのに、といふ語氣で餘意を含めたのぢや ○秋霧のぼんやりして、からりと晴れる時のなく、常に人を思つて居る心には身の取まはしも、かう夢中で一向何もわからないのに、マア

清原ふかやぶ

蟲のごと聲にたてゝはなかねども涙のみこそ下になかるれ

○蟲のやうに聲にあらはし立てゝは泣かないけれども涙は絶間もなく内々で流れれてをるわ、

是貞のみこの家の歌合の歌

よみ人しらす

秋なれば山とよむまで鳴鹿にわれおとらめやひとりぬる夜は

「秋なればは前の夏なればやどにふすぶるの夏なればと同じく秋になればといふ事」とよむはなりひいこと 山とよむまでは山になりひいかんほどにこの事で其聲の多く高きをいふ 「われをとらめやはわが泣く聲が鹿にも劣らぬといふのぢや 戀の情の切なるをいふのぢや ○秋になれば山か鳴りひいく程までに鹿が鳴くことであるが、わしが泣く聲もそれに劣る事があらうぞや 決して劣る事はあるまい、人に逢はないで、唯一人で寝る晩にはとぢや

題しらす

貫之

秋の野にみだれて咲ける花の色のちくさに物を思ふころ哉

上の句は序で例の其景物に依て詠歎したやうな句ひがある 「ちくさは種々さまざまといふ事千草といふのではない ○あゝあの秋の野に入り亂れて咲いて居る秋草の花の色は種々さまざまである 其種々さまざま、われのこれのと入亂れて心配をする此頃であるかいナ、

みつね

ひとりして物を思へば秋の田のいなばのそよといふ人のなき
 獨りでは一人してぢや 物を思へばは物を思ふて居ればぢや これを思ふ
 にの意としてむつかしくいふはよくない 秋の田の稲葉のはそよとの序で
 例の誰もとひかけたではなく空しく秋の田の稲葉に風が渡るとやうの句ひ
 がするのぢや そよはもとそれよといふ意なのが漸く轉じて只軽く應ずる
 辭となつたもので、今の世にサウといふ位の辭こゝではそれを稲葉のそよぐ
 にかけていうたぢや ○一人して物を思うて居れば秋の田の稲葉の上に風
 がふいてそよぐするばかり、そよサウと誰一人わしを問ひなくさめてくれ
 る人もない事よマアで、「いふ人のなきはなき事よといふ歎息を含めたのぢや、

ふかやぶ

人を思ふ心は雁にあらねども雲井にのみもなきわたるかな
 「雲井にのみは空にのみと同じで即ちうはの空の意 前のなくねそらなる
 同じぢや ○人を戀ひ思ふ心は雁ではないけれども常始終うはの空にはか

りなきつゞけてをる事かいナア、

たみね

秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人の戀しかるらん
 「秋風には秋風のふくにつけて琴のねが聞えるのぢや 秋風はうらさびしい
 ものでそれに琴のねがするといふが何となくおもしろいぢや 「かきなすは
 「かきならずぢや これに自身がしらべるといふ説もあるがそれは従はれな
 い 他の琴のねを風がさそうて來るのぢや ○秋風が吹きくるにつけて、い
 づかたやらでかきならず琴のねが聞えるが此琴の聲を聞いてさへもわけも
 なく無證に人が何でかう戀しいのであらう、

つらゆき

まこもかる淀の澤水雨ふれば常よりことにまさるわがこひ
 上の句は常よりことにまさるといふにかゝる序ぢやが 「雨ふればの句が雨
 の日は一層人を思ふの情がますますものぢやから戀の意の方にも何分かかゝる
 所がある、そこがおもしろいのぢや 借又水の事を古くもひとこひともい

ふた このこひも水にかけていうたぢや ○あの真菰を刈る淀の澤水が雨
がふる時は平日よりも増るがわしの戀の情も平日より増る事ぢや、
やまとに侍りける人につかはしける
こえぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみきよ渡るかな

是は比喩の歌ぢや 越えぬまはは境を越えぬ間で即ち大和の國へ入らぬこ
と 之を逢はぬ間の意といふはわろい 又吉野の山に入らぬ間といふ説も
とられぬ 唯大和の國に入らぬといふを山の縁語からこえぬといふたぢや
人づては人傳への約りたる詞 吉野山の櫻花はうるはしいものと名に立
つて居るもの、それを先方にたとへて人づてにのみきよ渡る哉と歎する上に
自然とあひ見たく思ふといふ意がしられるぢや ○大和國に入らぬ間はか
の名高し吉野の山の櫻花を唯人づたへにはかりうけ玉はる事であるかいナ、
(どうぞあひみたいと思ふけれども)
やよひばかりにもよたうびける人のもとに又人まかりて
せうそこすときよてよみてつかはしける

「やよひばかりは彌生時分といふ事 ばかりは其頃を大よそにさす辭」もの
のたうびは物のたまひの音便で話をした事 此時代男女交を結ぶ事をもの
いふというたぢや 又人まかりては又他の人が其女の所へいつたぢや 「せ
うそこは消息で音信といふ事 三月時分話をして近づきとなつた婦人の所
に、又他の人が訪うて音信するとの事を外から聞き込で詠でおくつたのぢや、
露ならぬ心を花におきそめて風吹くごとに物思ひぞつく

女を花によせていうた歌で、三月頃の歌ぢやからである 風吹くは即ち他と
音信するをいふ さて言外に近付となつたを後悔する如き意がみえるのぢ
や ○露の花におくものぢやが露でもないわしが心を花の上におき初めた
に依て風が吹く度々に、他と音信する事を聞く度々にあゝ散らねばよい(他に
心が移らねばよい)といふ物思ひがさせらるゝは、

題しらず

坂上是則

我戀にくらぶの山の櫻花まなくらるとも敷はまさらじ

くらぶるを倉部の山にいひかけ さて櫻花とうけてまなくの詞をおこした
のちや 櫻が移ろひ方になつて散るさまは實に目も迷ふ程に數の多いもの
ぢや それを思ひの數に比較すといふぢや ○わしが戀にくらべて見たな
ら、あの倉部山の櫻花が移ろひがたになつて散るさまは實に夥しい數ぢやは
れど、されどわしが思ひの數にはまさるまいと思はれる、

むねをかのおほより

冬川のうへは氷れる我なれや下に流れてこひ渡るらん

「上は氷れるは水の流れるさまもみえぬをいふで、即ち何げなく見せかけるに
いふ 流れては例の生存へてをかけた詞ぢや 此なれやもなればやぢや
○冬川が上の方は氷つて別に水がありげもなくみえるは、わしが戀と同じで
あらうか、わしも上へは何げなくもてなして居れど、下の方の内しよでは流
て(生存して)こひつゝ、月日をおくるが、丁度さうみえる わたるは川の縁語ぢ
や

たゞみね

たぎつせに根ざしとゞめぬ浮草のうきたる戀も我はする哉

「たぎつせは川の早瀬 根ざしといめぬは早瀬なる故たしかに根をとゞめず、
浮きたゞよふをいふ 是も上はうきたるといはん序で、此序中よのさま
なる事によりて、迷ひたゞよふやうな情が匂ふのぢや ○川の早瀬で根ざし
をとゞめることの出来ぬ浮草が、うきたゞようてをる 其うきたゞようて頓
とおちつかない戀が、アわしはせられる事かいな、

ともものり

よひくにぬぎて我ぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし

「かりころもは一本からころもとある方がよいと古人もいはれた からころ
もはたゞ着物の事 上の句はかけての序 衣を脱いで寝るとて、衣桁の類に
かけるといふぢや 此序中例の寢所に入るについて、毎夜く戀の情の一層
堪へがたいやうなさまが匂ふのぢや かけては其人にわが心をかけるぢや
○毎晩く脱いでわしが寢所に入る着物は衣桁にかけるが、其着物ではない
が、かけてあの人を思はないといふ事は、ちよつとした時のまでもない事ぢや、

東路のさやの中山なか〜に何しか人をおもひそめけん

佐野中山は遠江佐野郡にあるからあつまぢといふ 初二句はなか〜の序
で例の人に逢ふ事のはるかなる情がこもる 此時代は京からはさやの中山
を至極遠方のもとして居た時分ぢやからだ 「なか〜」には却つての意に
も又なまじひなまなかといふ意にもいふ詞ぢやがこゝはなまじひの意ぢや
何しかは答めいふかる辭 何としてかといふやうな意 あゝあの遠く隔つ
て居る東海道とうかいだうの佐夜さやの中山なかつまのなか〜即ちなまじなまなかに何としてかあ
の人を思ひそめた事であつたらう遠方とんぱうにある人のやうに容易に逢ふ事も出
來ないのに

しきたへの枕の下に海はあれど人を見るめはおひずぞあり
ける

「しきたへのは枕詞 枕の下の海は涙の多いをいふ 臥して泣けば涙は枕を
傳うて下に流るゝものぢやから涙が多いを海というたぢや 海松布は海に
生ずるもの 海といふよりいうたぢや 畢竟は人に逢見ぬからの涙ぢやけ

れどかう言ひなしたのぢや ○獨寝の淋しい枕の下には人を戀慕ふ涙かた
まりて海となつて居れども其海には人を見をみるめといふものは生えない事
で
サあるわい、

年をへて消えぬ思ひは有ながらよるの袂は猶氷りけり

思ひのひを火にかけ さて氷は火にとけるものなれば涙の氷がとけぬとい
ひなしたのでよるの袂の氷るとは涙をいふのぢや ○年久しく立ても消え
ないわしが此思ひといふ火は有るけれどもよるきて寝る着物の涙の袖は相
かはらずやはり氷つてあるわい」といふので言外に年を経て逢はぬ事が知
られぬのぢや、

つらゆき

我戀はしらぬ山路にあらなくにまどふ心ぞ佗しかりける

○わしが戀はしらぬ山路やまぢを行くでもないのにどちらへ向いたらよいやら
とまどはしく迷ふ心がサつまらない事であるはい、

くれなるのふり出つゝなく涙には袂のみこそ色まさりけれ

此歌の紅のふり出といふは夏の部唐紅のふり出といふとはちがうて是は枕詞でないと遠鏡にいはれた通りぢや「ふり出のふりは副詞のふりで今もふり向く」ふりかへるなどいふふりで出づといふをつよめていふ詞 聲を立て泣くをいふ降るといふではない それを紅をふり出すことにかけてぢや故に紅の涙といふについで即ち紅の涙といふ事 それ故袂のみこそ色まさるといふぢや 紅で衣を染めるは總體を同一に染めるものぢやがこれは涙をうけるは袂でする事ぢやから袂ばかり色がまさるといふのぢや 紅の涙は血の涙で思ひの切なをいふぢや ○聲をふり出でて泣きくする紅の涙には袂ばかりがサ色がまさる事であるわい、

白玉と見えし涙も年ふれば唐くれなるにうつろひにけり

「うつろひはかはり變ずること 年を経るに従ひ情がますます深くなつたをいふ ○白玉の如く白く見えたりし涙も年月を経過するに従つて戀に心を痛める事が多くて遂に唐くれなるの紅涙と變るに至つたわい、

みつね

夏蟲を何かいひけむ心から我も思ひにもえぬべらなり

此夏蟲も飛蛾の事ぢや ○夏蟲の火に入て身を失ふをおろかな事ぢやと何でいうた事であつたか、わしも自分の心づからで戀の思火にもえて身をも失ひさうになつた、

たみね

風吹けば峯にわかるゝ白雲のたえてつれなき君が心か

上の句はたえての序で例の世間の人にいひ騒がれてといふやうな意味が自然とひくのおぢや「たえては一向に」といふほどの辭で音信が絶るといふのではない ○風が吹くに依て峯に棚引いて居たのが切れて別れる白雲のやうにたえて即ち一向に同情を寄せてくれぬ君が心であることかいナ

月影に我身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む

「月影は只月といふ事 すべて歌に月といひ月影といふは専ら調に依ていふものぢやからあながちに拘泥して見るべきではない ○あゝあの月にわしが身をかへてなる事が出来るならばどうぞかへたい さうしたならばあの

同情のない人とても月をば感の深いものと見て親しむであらうからに、

ふかやぶ

戀死なば誰が名は立たじよの中の常なき物といひはなすとも

誰が名はたゝしは別人の名は立つまい唯かの人の名が立つたらうといふので 即ち誰のために戀死をしたといふ名の事ぢや ○わしが戀死に、死んだならばたれも外の人の名は立つまい(只あの人が爲めといふ名が立つであらう よしや先方では世上の老少不定常のない物ぢやとよそしく言ひなすとても、

貫之

津の國の難波の蘆のめもはるにしげきわが戀人しるらめや

上の句はしげきの序 「めもはるには芦の芽が張ると目も遙とをかけたぢや これを只目も遙といふ意だけで芽が張の意はないといふ説もあるが 人しるらめやの句に對して芽も張の意のある事は明かに知られる 芦が角々み初めて廣々したところに一面に芽出しをしてをるがふと見ては目に立

たん、それをしげきわが戀人しるらめやとつけたが面白ぢや 只蘆が一面におひしげつてあるとしては人しるらめやの句が妙味がなくなる 序歌といふものはおひくお話し申すやうに後の意に關係はせぬけれども何分か句ひとなる所がある ところが序歌の妙處ぢや 即ち此歌で「目も遙」に「芽も張」をかけて後の人しるらめやの句ひとするの類ぢや ○津の國の難波の浦の蘆があれあのやうに芽組んで見渡し遙かの場所一面に角々みそめて居るが、(ちよつとみてはまだ目に立たぬ)あの芽のやうにしげく切なるわしが戀の思をあの人はこれほどまでとはどうしてしらうぞや、しらんに相違ない、手もふれて月日へにけるしらま弓おきふしよるはいこそねられね

「しらま弓は白檀弓で、白檀弓の木で作つた弓ぢやが 此歌ではまゆみといふに別に意はない、只木の弓といふまでのことぢや 上の句はおきふしといふにかゝる序ぢや さておきふしといふこと、古來まだ説き得ない 古代弓を射る時のさまぢやなどいふ説もあるが従はれない 是は弓は弦をかけれ

は屈み弦をはづせば伸るものぢやから其屈伸をおきふしといふ 故に古く
 弓におきふしと多くいうてある さて古代の弓は竹は用ひないで木ばかり
 を用ひたのぢや 木であるから平生しげく用ひれば自然と屈み僻がついて
 張が弱くなり十分に屈伸せぬやうになるものぢや 久しく用ひずして捨て
 おいた弓は張が強くなり十分に屈伸するものぢや 故に手も觸れで月日久しく
 経た弓とかゝつておきふしといふをおこしたのぢや これで此歌の序は能
 くわかる さて此弓の伸屈を安眠が出来ないで寝たり起きたりする起臥と
 いふにかけたのぢや 即ち夜は起臥寝を安く寝られずといふのを弓からい
 ひおろすからしておきふしよるといふたぢや 寝は寐るの體言 後には體
 言用言ともにねといふが古代は朝寢をわさひ晝寢をひるいといふ如く體を
 は皆いといふたぢや 故に「いこそねられねは寢入る事が出来ぬといふぢや
 さて此いこそ」の「い」が序の弓とあるに對して射といひくが前の「人しるらめや」
 の句が「芽も張るにひやくと同じで、こゝが序歌の妙處ぢや ○手をも觸れな
 いで月日久しく立つた白檀弓は十分おきふしするが、わしも戀の情が切で起

きて見たりふして見たりして夜るは安眠するを得ない、

人しれぬ思ひのみこそ佗しけれ我が歎きをば、我のみぞしる

「思ひのみこそ」は「思ひの身こそ」で、人しれぬ思がある身こそといふのぢや 思
 ひばかりこそといふではない ○思ふ人にそれと知られぬ思がある身はサ
 はえなくつまらないものぢや わしが此やうに深く歎く事も唯わし一人は
 かりがサ知るだけぢや思ふ人は夢にもしらぬ事ぢやから

とものり

ことに出ていはぬばかりぞみなせ川したに通ひて戀しきもの
 を

水無瀬川は攝津國で今三島郡の内ぢや 此川はしばしの間、地中を流れて行
 くから古く行水なくて流るゝ由をいふ 依て下に通ふといふ枕にしたぢや
 五句ものを下は下に意を含めたので、さやうとも人は知るまいといふやうな句
 ひがするぢや ○詞に出してそれと言ひあらはさないばかりの事なるぞ、わ
 の水無瀬川の地の下を盛にだぎり流るゝやうに心の内で思を送つて戀

慕うて居るものを(あの人はさうは知るまい)

み つ ね

君をのみ思ひ寐にねし夢なれば我心からみつるなりけり

當時人を夢に見るは、其人の心が通ひくる事に打任せていうた事ぢやから、此歌もそれを本としてよんだものぢや。○君の事ばかりを思ひついでけながら寝たる眠の夢であるからして(君に逢ふと見たも)つまりわしが心から見た事であるわい(君が心か通うて来たではなからう)

た ヶ み ね

命にもまさりてをしくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり

「命にもまさりて」は、其惜しむ情の甚しいをあらはす詞で今も命より大切な品ぞなどいふも同じぢや。「見はてぬ夢」は見かけた夢で事すぢのたゝぬ程の夢ぢや。こゝでは思ふ人を見た夢の上からいふのぢや。○命よりもまさつて惜しい程に思はれるものは戀しい人に逢ふと見かゝつた夢が半途でさめる

事であるわい、

はるみちのつらき

梓弓ひけば本末わが方によるこそまされ戀の心は

上の句はよるにかゝる序で、是に例の思ふ人がわが誘ふまゝに我方に順ふといふやうなる意が句ふのぢや。すべて序歌には此妙處がある事ぢや。是は古人の會ていはぬ説ぢやが是まで段々御話し申す所でも、是は明かにわかる事であらうと思ふ。「あづさ弓は梓の木で作つた弓。本末は弓の下を本といひ、上を末といふ。弓を引けば中は向ひに張り上下は我が方によるものぢや。○梓弓を引けば本と末とは引くがまゝにわしの方によつてくる。あゝ其よるこそは、殊更にまさつてくるよ、人を戀しいと思ふ心は

み つ ね

我戀はゆくへもしらずはてもなし逢ふを限と思ふばかりぞ

此歌も古來十分の解釋を得ない。「ゆくへは行方」で此道からゆくといふ方角の事。此歌では手段の意に用ひたぢや。「はてはあてといふ意で地域の事

此歌では機會の意に用ひたぢや 限は限界でこゝでは目的の事ぢや それ
を道路の詞をかりて、ゆくへといひはてといひかぎりというたのぢや ○
わしの戀はどこの道からゆくといふ手段も知らず、又いつといふ機會もない、
只むさと逢ふといふ事を目的として居るのみの事で、サマことにつらまへど
ころがない漠然とした戀である、

我のみぞ悲しかりける彦星も逢はですぐせる年しなければ

「彦星も」といふもの辭は雖のもで、一年に唯一度ならでは逢ふ事が叶はんで悲
しい戀の例にいはれて居る彦星といへども、といふ意を此にも含んでをるの
ぢや ○わし一人ばかりがサ實に悲しいものではあるわい 一年唯一度の
逢ふせといはれて居る彦星と雖も其一度の逢瀬が間違うたといふ年はサな
い事ぢやからといふので 言外に數年に渡つて逢はぬを歎じたのが知られ
るぢや、

ふかやぶ

今ははや戀ひ死なましをあひ見むと頼めしことを命なりける

「命なりける」は命となつて存命してをるといふ事ぢや ○今頃はもはや戀死
に、死んでしまふ時分であらうのをかやうに生きて居るはあの人から逢は
うとわしに頼ませおいた詞がサ命となつてをる事ぢやわい、といふので 言
外に逢はんといふた詞の今日まで實行せられぬを歎じた意が知られるのぢ
や 逢ふとは契を結ぶをいふ、

みつね

頼めつゝあはで年ふる偽にこりぬ心を人はしらなむ

○逢はう逢はうと頼ませては逢はないで年久しくなる度々のだまし詞に懲
りてやめる事もなく、今日までもかうして居るわしの心の深さをどうぞあの
人に推量してもらひたい、

とも のり

命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへは惜しからなくに
「何ぞは」何であらうぞなんでもないと輕しめていふ詞 「露のあだものは露
の如くもろくはかないものといふこと 命といふものは朝ありて夕べはな

きもろくはかないもの、それをあだものといふぢや、あだものををはゝる
をの意で重い辭ぢや、○命なんて何であらうぞ、なんでもない露のやうな脆
くはかないものであるのを、もし逢ふといふ嬉しいことにサかへることが、で
きるならば、ざら／＼をしいことはない事である、といふのぢや

三三三

古今和歌集卷第十二終

古今和歌集卷第十三

戀歌三

やよひのついたちばかりしのびに人にもものらいひて後に雨
のそほふりけるによみてつかはしける

三月の月はじめの時分内密に人と話などをして後の日、雨のそほ／＼降つた
時、其人の所へよひで送つたのぢや、此ついたちばかりといふ句、普通本には
「ついたちより」とあるが、今は打聽本に従うたのぢや

在原業平朝臣

おきもせずねもせてよるを明しては春の物とてながめくらし
つ

「おきもせずねもせては、目がさめきるといふでもなく、寐入るといふでもなく
といふ事で、起きあがるでもなく、寐臥すでもないといふではない、春の物
とては春の時節の物とてぢや、ながめは長雨に長目をかけていふ、長目の

事は春下小町の歌でお話申した通りぢや ○目がさめ切るといふでもなく
又寝入るといふでもなくうつらくと夜をばあかしては晝となれば春の此
時節のものとして朝から晩まで長雨長目くらしてしまふ事ぢや君の事を思ひ
ついでといふのぢや

なりひらの朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはし
ける

とし行朝臣

つれづれのながめにまさる涙川袖のみぬれてあふよしもなし
是も霖雨に長目をかけたぢや 霖雨は徒然なるもの 又人を思うて何事も
手につかず茫然たるは徒然なるものぢやから相兼ねてつれづれのながめと
いうたぢや さて雨が降れば川水がまさるもの 又物を思へば涙が出づる
ものぢやから是も相かねてまさる涙川とうけたのぢや ○終日つれづれと
してくらす長雨(長目)にまさる涙川は只袖ばかりがぬれるだけで逢ふといふ
便宜もないことぢや

なりひらの朝臣

かの女にかはりてかへしによめる
浅みこそ袖はひづらめ涙川身さへ流るときかばたのまむ

「浅みこそ」のみは「浅くてこそ」といふこと すべてかゝる類のみは「く」の意と
いふ事は「已に申しておいた」 ○浅くてある事なればこそ袖がぬれる事であ
らう その涙川はもし身の丈も立たず流れてしまふ程深いと聞く事ならば
たのもしくも思はう(が、それではまだ「頼まれぬ」)

よみ人しらす

よるべなみ身をこそ遠く隔てつれ心は君がかげとなりなき

此歌は題しらすぢやからもとよりどういふ事からよんだかわからぬが し
かし歌がらから考へてみると是まで同じ地に在た人が遠くの地に行きてさ
て讀んでやつた歌と思はれる 「よるべ」は「寓方」で身を寓せるところ 方へ
といふは「目方前」「肩方傍」「尻方後」行方の類ぢや 「君が影は君が身に添ふ
影」といふ事ぢや ○わしが身のよせどころがなく、身體こそはかやうに遠
方の地に隔ておく事ともなつた事ぢやが 心は君が身に添ふ影となつて少

しも君を離れぬ事である

いたづらに行きては來ぬる物故に見まくほしさにいざなはれ
つよ

「いたづらにはむだにの意」物故にはものであるのといふ事はかねて申し
た通り「見まくほしさに見たいといふ事を一つの體言のやうにいひなし
たので「見たいと思ふ情に」といふやうの詞 借此行きては來ぬるといふは
といふ辭に味があるぢや 行きは行きても逢ふ事がならず空しく歸り來る
ことがたびくの事といふが此はの辭でしられるが妙であるぢや ○むだ
に空しく行つてはかへり行つてはかへりして逢ふ事も出來ぬものぢやのに
只見たいといふ情の爲につり出されつり出されしては(かうむだ足をする事
よ
あはぬよのふる白雪とつもりなば我さへともにけぬべきもの
を

此歌はある人のいはく柿本人まろが歌なり

「君に逢はぬよがあれあのやうに降る白雪のやうに段々とつもつて行く事な
らばわしも雪のやうに同じく消え失せ死んでしまふ事であらうものをあ
どうしたらよからうと、いふぢや さて此柿本云々の注はもとより後人の書
入れたもので人丸の歌がらでないは明かの事、とるに足らぬ事ぢや、

なりひらの朝臣

秋の野に笹分けし朝の袖よりもあはでこしよぞひぢまさりけ
る

是は女のもとに行きて空しく歸り來て後よみておくつた歌と見えるそれは
歌の上にあらはれて居るがこれも古人はまだいうてない 上の句さ、分け
し朝の袖といふは朝女のもとからかへる道の事で即ちさぬくぢや 逢は
ずに空しく歸つて來た夜の袖はそれよりもぬれ増つたといふのぢや 此あ
はでこしとあるを、勢語、六帖などにあはでぬるとあるは後人の改めたもので
大に妙が減するぢや 借上の句は露といはで露を示し 下の句は涙といは
で涙をいふたと打聽にあるが實に其通りでおもしろい ○秋の野の露深き

に殊ことに小篋せうせうを分けてかへるきぬくの朝あさの袖そでは取分けてぬれるものぢやが逢あふ事ことが出来できないで空あざしくかへり來きた夜よは一層いっそうぬれまざる事ことぢや、それは露つゆではなくて涙なみだで

小野 小町

みるめなき我身をうらとしらねばやかれなて蟹かにの足たゆくく

是こゝは我われに心こゝろをかけてしばく來くるる人ひとに對たいして讀よんだもので海濱うみづみのものによせて詞ことばを借りた歌うたぢや「みるめなきは海松布うみまつぬいの生なせぬといふに容貌かたちの見るに足たらぬといふをかけ「我身わがみをうらは此時代このときわが身みをうらと浦うらにいひかけたが多いが大おほかた今いまいふつまらぬといふ程ほどの意いに用もちひられてをる此こゝのつまらぬといふ詞ことばは侘わびてはかなく思おもふ意いにも失敗しちがい失策しつさくの意いにも又または見るに足たらず取るに足たらぬ意いにもいろくのところ用もちひられるがわが身みをうらのうらもこれと同じく種々しゅしゅの意いとなるこゝの我身わがみをうらは即すまち見るに足たらぬといふ程ほどのつまらぬぢや「かれなでは離わかれずの意いこゝでは絶たえず常つねに

といふこと、「あまの足たゆく來くるるは蟹かにが砂地すなぢを駆かけめぐるによせてしげしげに足を運び來くるるをいふ足たゆく來くるるは足を勞あつし來くるるぢや ○海松布うみまつぬいがな即すまち見るにも足たらぬ わしが身みを浦うら即すまちつまらぬと知らぬ事ことでもあらうか、絶たえず常つねにわの蟹かにが足を疲つからしてしばく來くるよ、

源宗于朝臣

あはずして今宵明けけなば春はるの日の長ながくや人ひとをつらしと思おもはむ
今夜こんやは必かなず逢あはれるであらうが、もしも逢あはれないで、此夜このよが明あけるやうな事ことが有あつたならば、此春このはるの日のそれではないが長ながくいつまでもあの人ひとをつらく情じやうのない人ひとと思おもふ事ことであらう、

みふのたゝみね

有明ありあけのつれなくみえし別わかれより曉あけばかりうきものはなし
此歌このうたは女おんなの許もとに行ゆきたるにさる由よしが有あつて空あざしく歸かへつた後に詠よんでやつたものとみえる「有明ありあけのは枕詞まくらことばに、おいたといふ説せつが宜よろしい「有明ありあけのうちに月つきといふ事ことをこめたので、有明ありあけの月つきが夜の明あけるにも係かはらず、空あざにあるが同情どうじやう

のないさまに見えるから見る所の景物に依つてつれないといふ枕にしたのぢや「つれなく見えしは無情に思はれた」といふ意 ○有明の月のやうに同情なくさぶく思はれたりし、おの日の別れからして、曉はどいやに厭はしく思はれるものはない、といふので、これを逢うて別れの事とするはよくない 逢うて別れるといふは常の事で、別にかやうに取分けていふべきでもなく、既に六帖にもくれどあはずといふ題の歌とした位ぢやから逢はぬといふ事は明かである。

ありはらのもとかた

あふことのなぎさにしよる浪なればうらみてのみぞ立歸りける

渚は、波うち際のこと、それを逢事のないといふにひかけたぢや しは強めの辭 浦見は恨みをかねたぢや 立かへるも波の縁語ぢや ○逢といふ事はいつでも一渚にサよつてくる浪であるから只空しく浦見てばかりサ立ちかへる事ぢやわい、

よみ人しらず

かねてより風にさきだつ波なれやあふ事なぎにまだき立らむ

波は風に依つて立ち名は逢事有て立つもの 風にさきだつ波即ち和に立つ波あるべからず 逢事なくして名の立つべからざる事なるに風に先立ちかねてよりたつ波ともいはんか 逢事のなさに早く名の立つは何故ぞとの事でさきだつ波といふに立つ名をかけ逢ことなさに和をかけたのぢや ○前かたから風に先だつて立つ波とでもいはうか、あふ事のない和に早くなせ名の立つであらう、といふのぢや がこれらは随分むつかしい云廻しであまり感服せられん、

たゝみね

みちのくにありといふなる名取川なき名とりては苦しかりけり

名取川今は陸前名取郡ぢや 上の句は序で當時陸奥といへば至つて遠方で、其地にある名所などは、只遙かに名ばかりを聞くに止る事 「ありといふなる」

の語調でも自然しられる。さて此不慥なやうな語調のありと云ふなるが、自身みづかの事を人がかういふと人傳ひとつたに其なき名の事を聞込んだにひいておもしろく聞えるのぢや。さて又なき名とりては、はは清音で、此はといふに事實ある名なれば苦しからねどといふやうな意がしられるぢや。是は畢竟なき名といふも、先は多くは其人を思ふからおこるものであるぢや。○あの陸奥には名取川といふ川があると遙かに聞いて居る、其名取川ではなく、わしの事を彼是いふ人があるさうぢやが、事實無い名を取つては迷惑な事であるわい。

みはるのありすけ

にあやなくてまだなきなきなの立田川渡らてやまむものならなく

立田川は名の立つといふにかけて、さて渡るといふ枕においたのぢや。○むちやと早くから事實のない名が立つた、しかしどうしても逢はんでしまはうものではないのに、立つなら立つてもかまはない」といふのぢや。「ものならなく

くに強くおさへた言外に無き名もいとほぬといふ意がおのうとひやくぢや。

もとかた

人はいさ我はなき名のをしければ昔も今もしらずとをいはむ

此歌は後撰集にも出て居て、贈答の歌ぢやから、後撰集の歌をお話し申さう。後撰集に元良親王が大つぶねに物をのたまひしに、更に聞入れざつたからつかはされたといふ詞書が有て、「大方はなぞや我名のをしからん昔の妻と人に語らん」とある返として「大つぶね」といふ名で此歌がある。かけ歌の意は「よし／＼左様につれなくはさてあるべし、大かた我らは其許に對して名を惜まぬ故に昔語らうた人である」と人に話すやうにせうとちや。此かけ歌で此歌の意はよくわかる。「いさは知らぬといふ意をあらはす辭いやさどうかしらぬといふ意」「しらすとを」のは感歎辭で其詞の意を重くするやうの辭ぢや。○あなたはいやサどうかしらんが、わしは事實のない名の立つは惜しいから昔も今も固より關係のない他人ぢやと申さう、「といふのぢや」後撰集と

はよみ人かちがつて居るが、それはどういふ事かわからぬ、

よみ人しらず

こりずまに又もなき名は立ちぬべし人憎からぬ世にしすまへ

こりずまにのまは、萬葉に逢はずまにとあるまと同しく添はる辭「こりずまには今せうこりもなく又は手懲もせずなどいふ意」人にくからぬは古來種々むつかしいひなすが何も左様にやかましい事ではない只人が憎くない世といふまでぢや 但し世間には憎い人も怖ろしい人も哀しい人も種々ある事ぢやが、こゝでは左様に世間の人をならべたてゝいふではない 只憎くないなつかしいやうな人が随分あれこれあるものぢやから其點からいふので びた解にすれば憎くない人が多い世といふ位の事ぢや ○手ごりもなく又ふたゝび事實のない名が立つ事もありさうぢや とかくに人の憎くない此世の中に住んで居るからには、
ひむがしの五條わたりに人をしりおきてまかりかよひけり

しのびなる所なりければ門よりしもえ入らでかきのくづれよりかよひけるをたびかさなりければあるじきよつけてかの道に夜ごとに人をふせてまもらすればいきけれどえあはてのみかへりてよみてやりける

なりひらの朝臣

此詞書は後の人が伊勢物語を見合せて、さかしらに書加へたもので、もとは前の歌どもと同しく題しらすであつたならんと先輩いづれも申しおかれて實にそれに相違なからう 但し歌に依て思ふに女の家で何分か注意して守つた事とは見えるのぢや、

人しれぬ我が通路の關守は宵々ごとにくちもねなむ

當時道路には要所々に關門が有て、そこには關守といふて番人が有て夜も寝ずに守つた事である ○人にしられず内々で通ふわしが懸路の通ひ道を守る番人は毎晩々々どうぞ寝て休息してもらひたい、したなら其間に通はうから

題しらす

つらゆき

三四六

忍ぶれど戀しき時はあし引の山より月のいでこそくれ

三四の句はいでゝの序で例の其時のさまに依ていふたものぢや ○こらへて見てもこらへされず戀しくてたまらぬ時はあゝあれゝあゝの山から丁度月が出てくるわしも今家を出てくる。

よみ人しらす

こひくゝて稀にこよみを逢阪のゆふつけ鳥はなかずもあらな

ゆふつけ鳥はこゝでは只雞の事をいふ それは今宵を逢ふといふを逢坂のとうけてさてゆふつけ鳥としらべおろしたからぢや ○常日頃戀にこがれてやうゝの事で珍しく今夜といふ今夜サ嬉しく逢ふ事が出来たどうぞゆるゝ語りたから鶏がなかぬやうにしてもらひたいといふので 鶏がなければ夜が ажけるからぢや 偕此歌の初二の句始めて逢ふ戀の語氣があると いふ説もあるがそれは畢竟此集の逢戀の始に入れられてあるからの説ぢや

歌の上ではたしかには知られない

をのゝこまぢ

秋のよも名のみなりけり逢ふといへばことごとくなく明けぬる物を

○秋の夜を長いものといふも只名ばかりの事ぢやわい 逢ふ晩となればなんのことごとくなく夜が明けてしまふものを

凡河内みつね

長しとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれば

昔よりあふ人からは昔より言はれてをる逢ふ人からといふ事であふ人からといふ諺が古來あつたからいふと古人の説の通りぢやが 此あふ人からといふ諺はすべて其人によつてわが感情を異にする事に用ひられて居る諺なりしなるべきを秋の夜にとりなしたが此歌の趣向の處ぢや 畢竟あふ人からに依て面白からぬ事も面白く感じ又面白き事も面白からず感ずるといふをこゝでは長きものを長からず感ずといひなしたぢや ○別に長いも

のとはサ考へられぬといふは昔からいはれて居るあふ人からの謠のやうに
戀しい八にあふた秋の夜であるから

よみ人しらず

きのしよ目のほがらくと明行けばおのがきぬくなるぞ悲し

「しのゝめは夜あけぎはの事 ほからくとは夜のあけゆくさま 「きぬく」
は男女起出で、相別るゝをいふ 重ねてふしたる衣をおのゝ分ち着て別
るゝこと 此歌顯注にはおのがきぬくさるぞと有て其方がよいといふ説
もある 然るときは自身々々のきものゝをさるぞ悲しきといふ意となる
ぢや ○夜あけ際のしらく」とだんくあかるく明けて行けばおのゝ起
出で、重ねし衣を分ち着て別れるがサ悲しい事ぢや、

藤原國經朝臣

明けぬとて今はの心つくからになどいひしらぬ思ひそふらむ

明けぬとては夜が明けたと聞いてぢや 自身親しく夜が明けたと見たでは

ない、侍女などが夜の明けたを告げたぢや これらの事は此時代の物語ものを
をみればよくわかる 此句につきてむつかしく説く説があるからちよつと
お話し申しおくのぢや 「今はの心は今は別れてかへらねばならぬといふ心」
ぢや 「いひしらぬ思ひはいひ述べる事の出来ぬ情といふ事其戀愛の情の深
きをいふ ○夜が明けたといふに依て今はとの心がつくまゝに何としてか
く何ともかともいひやうのない情愛がまさり加はる事であらう、

としゆきの朝臣

寛平御時きさいの宮の歌合の歌 明けぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほぢつゝ

「明けぬとては、このは前のとはちがつて常の意即ち明けたからぢや 「こき
たれては、其降るさまをいふ ときは副詞で、かきくらしなどのかきに同じぢ
や 「こきおろす」「こきちらす」のこきではない ○明けたからとて別れてかへ
る道には、かきこほすやうに雨も涙もびしよふりにふりつふりつ(どうもたま
らぬ)

籠

しのよめの別を惜み我ぞまづ鳥よりさきになきはじめつる

○明方の別れがをしくてわしは先づわのにはとりよりもさきになきはじめた事である、といふので鳥よりさきは必ず一番どりといふではない 明方は鶏がしばくなくものぢやからそれによつてよんだのみぢや。

よみ人しらず

郭公夢かうつゝか朝露のおきて別れし曉のこゑ

此郭公の曉の聲といふに二説ある 一は郭公によそへて思ふ人の聲の事をいふといひ、一は直ちに郭公の聲をいふといふのぢや 是は直ちに郭公の聲の事をいうたには相違ないがまだ説き方が十分でない 此歌は實際でよんだもので、曉に別れんとする折柄郭公が鳴いて過ぎた事を後に其事をよんでやつたものぢや 即ち起きて別れんとする曉に鳴き渡りしわの郭公の聲は夢でありしか現でありしか今おもへばさらに思ひ分かれたれぬといふので、其曉の事をこめたのぢや からみれば實に餘情が有て面白いぢや 「朝露の」は例の其時の景物の枕詞 ○わゝの時の郭公は夢で有たか現であるか(今

からおもへば更にわからぬわの朝君と共に起きいで、別れし時に聞いた曉の聲は

玉くしげ明けば君が名たちぬ、み夜深くこしを人見けむかも

玉櫛笥は枕詞 夜深くの深くは其縁語ぢや、○夜がもし明けて歸るならば君が名がたちぬべく思ふからして夜深うちに歸つて來しを、それでも猶人が見る事があつたらうか、どうかマア

大江千里

今朝はしもおきけむかたもしらざりつ思ひ出るぞきえて悲し

今朝はしもは、しもの辭に霜をいひかけ、さて起きと置きとをかね、又思ひ出づるに、日出づるをよせて、きえと受けたぢや ○今朝はサマアどうして起きて來た事やら様子もしらなかつた (別れの心まどひに其事を考へ出すにもサ死にさうに悲しい事ぢや 人にあひてあしたによみてつかはしける

なりひらの朝臣

ねぬるよの夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

「ねぬるよの夢をはかなみは、人に逢うた夜の事を始く夢といひなしたのちやまどろむはとろく、眠ることでおちついて睡るのでなく今いふとろりとするといふ位のこと、さて一首の解釋ぢやが此の歌は伊勢物語にも出て居て此集といひ伊勢物語といひ古來の註釋が深山あるがいつれも説きひがめて居る故に今は少し委しく御話し申すのぢや、はし書にある通り此歌は人に逢うて其翌朝よんでやつたものぢや但し業平の歌には、後人のさかしらに書加へたものもあるが是は其類ではない、依て朝といふ上に目を置いて解釋せねばならぬ、即ちねぬるよの夢をはかなみは、女に逢ひたる夜夢を結ぶ間合もなく匆々に別れ去つたをいふ、匆々に別れ去つた故に現とも覺えず夢をちするを夢をはかなみといふのぢや、さて匆々に曉深く歸り來りしからしばしまどろんだぢや、謂ゆるまたねをしたのぢや、またねをしたからさ

らでもはかない夢を、ちがます、はかなみがまさるといふたのぢや、まどろめばはとろくと眠つたのぢや故に伊勢物語には、此歌の末に「となんよみてやりけるさる歌のきたなげさよ」とある、此きたなげさは「いぎたなげさ」といふ事で、ねごさうに聞えるといふ事當時ねごさといふ事を「いぎたなげさ」といふた事ぢや、さてまどろんだから夢を、ちがます、甚しくなつたのぢや、○寝たりし晩の夢はいかにもはかなかりし事ぢやが、かへりきてまどろみたるからに、いよくます、はかなくなりまさる事かなといふのぢや、業平朝臣の伊勢の國にまかりたりける時齋宮なりける人、いとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに女のもとよりおこせたりける

よみ人しらず

此はし詞は例の後人が伊勢物語を見合せて作り加へたもので取るに足らぬものと古人が申しおかれた通りでもとは別のはし書が有たものと思はれる、

君やこし我や行きけむおもほえず夢か現かねてかさめてか

○君がわしの處に來たりしか、わしが君の處へ行きしか一向わからぬ 又それは夢で有つたか正しい現在の事の有つたか眠つた内の事か、目がさめて居る程の事の有つたか、昨夜の事はといふので、よべの事といはず言外に含ませたが面白いぢや

かへし

なりひらの朝臣

かきくらす心のやみに惑ひにき夢現とは世人定めよ

上の句は其人の爲に心迷うて分別の立たぬが闇夜道に惑ふやうなるをいふぢや ○まつくらになつたわしが心の闇にまようて一向に分別がたぬ故に昨夜の事が夢で有つたか、または現實の事の有つたかといふは、わしにもわからん世間の人に定めてもらふ外はない、

題しらす

よみ人しらす

うば玉のやみの現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

「うば玉の」は枕詞でこれに例の人目を忍んで内密にといふやうな意がこもる

ぢや、「いくら」もは、何程もといふ位の詞 ○人目を忍んで極密にちよつと逢

たのは現實の事とはいひながら、はつきりと逢と見た夢に何程もまさつた事はないわしといふので、「うば玉の」の枕が下の夢といふにひき合せて面白い、

さよふけてあまのと渡る月影にあかずも君を逢見つるかな

「月影」は「月影」の寫誤ぢやらうと先輩がいひおかれたが、實にさやうであらう それでなくては意をなさぬ、依て今はそれに依て御話し申す 上の句は序で即ち例の其わひ見し夜見る所のさまを直ちに序としたものぢや ○夜が更けて空に清くすみ渡る月影のやうに、いつまで向うてもあかないマア君に逢うた事ぢやつたナア、あゝうれしくも戀しい

君が名もわが名も立てじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ

「難波」なるは、みつといはん枕ぢや 難波には三津浦といふがあるからぢや さてそこでは綱引をするから、逢ひきにもかけたぢや ○君が名をも又わしが名をも立てぬやうにせよ、うから、人に對してわしを見たともいひなさるな、

わしもまた君にあうたともいひますまい。

名取川瀬々のうもれ木顯ればいかにせむとかあひ見そめけん

「瀬々の埋木は埋木は多く川瀬より出づるものぢやからいふ名取川阿武隈川には埋木をよみ來つてをる初二の句は顯ればの序ぢやが顯れば名が立つものぢやから名取川にひいき合て面白いのぢや。○陸奥の名取川の川瀬から出る埋木のやうにもしも世間に顯れ知られたならばどうせようといふ考へでわしはあの人と逢ひ始めた事であらう。さてよく我ながらわからぬ考へであつた。」

吉野川水のこゝろは早くとも瀧の音にはたてじとぞ思ふ

「水の心ははやくともは河流のたぎり流るゝを心のやるせなきによせていふのぢや。音には立てじは瀧の音を立てゝ人に知らるゝをかりて人に知られぬやうにするをいふ。○あの吉野川のたぎり流るゝ水の心はいか程やるせなくありとも、其たぎり流れる水の音に立てゝ人に知られるやうの事はせまいとサ思ふ事である。」

戀しくはしたにを思へ紫のねすりのころも色にいづなゆめ

「したにを思へは下は心中といふことをは感歎辭で前の「しらすとを」と同じく其詞の意を重くするやうな辭。紫の根摺の衣は色に出づといふ序之も其着たる着物など見る所に依て序としたのぢや。紫草を染料にするには根をもてする事で昔は多く摺りつけて色を取た事ぢやから根摺といふぢや。○戀しく思ふならば心の中でばかり思うて居られよ、其きて居る紫の根摺のきものやうに色にあらはす事は決してくしなざるな。顯はれては大變ぢやからをのゝはるかぜ

花すゝきほに出てこひば名を惜み下ゆふ紐の結ほゝれつゝ

「花すゝきはほに出ての枕下ゆふひものは結ほゝれの枕此下ゆふの詞のうちには心中にこめおく意をも含ましめたぢや。○花すゝきはほに出て人目にあらはれて戀ふ事ならば名の立つべきぢや名を惜むから衣服の下にゆふ紐の人目に見えず心中にばかりとやかくとふさいでをる。たちはなのきよきがしのびにあひしれりける女のもとより

おこせたりける

よみ人しらす

思ふどちひとりくが戀死なばたれによそへてふぢ衣きる

「思ふどち」は思ひ合ふ同志で彼と是とをいふ「ひとりく」が「は」どちらか一人が「といふ事」當時の詞づかひぢや「よそへて」はそれによせかづけてぢや「ふぢ衣」は喪服 當時親族の喪には一定の日數中喪服を着ること、之を服中というたぢや ○思ひ合ふ同志の君とわしとのうちもしどちらか一人が戀死に死ぬる事が有つたならばもとより内々の中で表だゝぬ間の事故何人が死んだとよせかづけて喪服をば着る事であらう、

かへし

たらばなのきよき

なき戀ふる涙に袖のそほぢなばぬきかへがてら夜こそは着め

かけ歌はひとりくがと有つて即ちどちらか一人とあれど主として女自身にかけていふものぢやから其の意をうけて女の死んだ時の事として答へたのぢや ○もしさやらの事が有つたなら泣きかなしむで戀ひしがる涙で袖

がびしよぬれになるであらうからそれをぬいで着かへながら夜るばかりサ 喪服を着よう(さうしたら人もみまいから)

題しらす

こまち

うつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るがわびしさ

「さも」こそあらめ「は」さやうでもあらうといふ事で至極さうあるべき事ともいふべきぢやと許す詞ぢや ○現實の上ではさやうにもあるべき事であるしかし世間に關係のない夢でさへもやはり人目を憚る事として見るのがつまらずおろかしい事ぢや、

限りなき思ひのまゝに夜もこむ夢路をさへに人はとがめじ

「夜もこむ」は晝ともいはずよるもの意で晝に對へてよるもといふこゝが上手の手段ぢや ○限なき思に任せて晝ともいはずよるも行かむ 晝なり夜なり夢路までをさへは人の答める事はあるまいからといふのぢや

夢路には足も休めずかよへども現に一目見しごとはあらず

下の句見しことはあらずは、見し事はあらずではない見し如はあらずぢやとの諸説で其通りぢや。但し前方ちよつとあうた即ち一目見し時の如くではないと説くは、たがつて居る。是は現在に一目見るが如くにはあらずといふので、夢のはかないをいふたのぢや。「見る」とは「見」は、見しことはと過去にいふは過去の夢の上に就きていふからである。○夢路ではいつもく足も休めず通つて逢ひ見るけれども、現實にちよつと一目でも見たやうにはいかぬ(一向にはかなくて)

よみ人しらず

思へども人目つゝみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね
人目つゝみは、人目を憚ること、それを堤にいひかけて、高ければとうけ、人目を憚る事の甚だしきによせたのぢや。川と見ながらに、彼はと見ながらをかけたので、彼を古くはかとのみもいうたは、彼は誰時の類ぢや。○話をしたいと思ふけれども人目つゝみが高く即ち深く人目を憚るからに、かは即ちあれはと目には見ながらよう近よる事をもせぬのぢや、といふので、渡るは川の縁

語、近接の事にいふのぢや、

瀧つせの早き心をなにしかも人目つゝみのせきと、むらむ

「早き心」は前の吉野川のと同じぢや。下の句は堤の水をせき止むるによせて、人目を憚つてこらへ忍ぶをいふぢや。○たぎり流るゝ川の早瀬のやうに、やるせなくたぎりこがる心を何とした事かマア、人目堤にせきとめられて、かうこらへ忍ぶ事ぢやらう、

寛平御時きさいの宮の歌合のうた。きのともものり

紅の色には出てじかくれぬのしたに通ひて戀はしぬとも

「くれなるの」かくれぬの、共に枕詞。隠れ沼は草などが生茂つてふとみては沼池とも見え隠れたるをいふ。「したに通ひては、人しれず心づかひする事互に心を通はすといふではない。○紅のやうに人の目に立つ色はあらずまゝい、有とも見えぬ隠れ沼の、人しれぬ心づかひに戀死ぬ程の事がよしあるとしても、

題しらず

みつね

冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこに通ふと人にしらすな

「つれもなくは、こゝでは何げなきさまをして人目をさける意に用ひたぢや
同感のないといふ意から轉じてかやうな意にも用ふるのぢや 鴉の氷の下
をくいつてゆく事と人目をさけるとを兼た詞ぢや 「そこに通ふは鳩の水底
にかよふと、そもとに通ふとを兼ねたぢや 初二の句はつねもなくそこに
通ふの序である ○あの冬の池にすんでをる鴉鳥が氷の下をくいつて人目
をさけて水底に通ふが其人目をさけてそこもとにわしが通ふといふ事を人
にはしらせられるなよ、

さゝの葉におく初霜の夜を寒みしみはつくとも色にいでめや

是も上の句は下の句の序ぢや 「しみはつくともは、しみは染むで身にしむな
といふしむぢや つくはしむ事を強くいふ詞しみ入るといふ意ぢや 霜は
木の葉におけば色が變ずるものぢやが笹の葉は變せぬからしみつくとも色
に出ぬとかけていうたぢや さて此序に寒夜殊に人を戀ふるやうのさまが
ひいくのぢや ○笹の葉においた初霜が夜が寒くて氷つてしみつくが、わし

も身にしみ入る程に戀しく思ふとても色にいで、人目にしられるやうの事
をせようぢや、

よみ人しらす

山科の音羽の山のおとにだに人のしるべくわがこひめかも

此歌ある人あふみのうねへのとなん申す

初二の句は音といふにかゝる序ぢやが是は此よみ人か又は相手の人かが山
科の音羽山の邊の人であるから、やがてそれについて序としたのぢや 序歌
は豫てお話し申すやうにむさと句をふさぐ爲におくものではないからであ
る さて是は人に語るななどいはれたるに對してよんだものとみえる 「音
にだに人語らぬは勿論風聞にでもぢや ○あの山科の音羽の山といふ
其音の風聞にでも人にせられるやうにわしは戀ふ事があらうかい決してな
し、といふぢや 注の此歌云々は例の後人の書加へたものぢや、

きよはらのふかやぶ

みつしほの流れひるまを逢難みみるめの浦によるをこそまで

三六四
晝といふを潮の流れてひるとかけ さて逢見るが爲に夜を待つといふを海
松布の浦によるとかけたのぢや ○満潮が流れてひるまとなる其晝の間は
逢ふことが出来ぬによりて海松布が浦によるといふ其逢ひみる目を得るよ
るをサ待つ事ぢや

平貞文

白川のしらずともいはじ底清み流れてよゝにすまむと思へば
白川は京の白川でしらずの枕におきさてそれに依て底清みぢやの流れてす
むなどいふ縁語としたのぢや 「しらずともいはじ」のものを味ふべきぢや 人
に問はれた時をあながちしらずとばかりいふまいの意が此もの辭にある
ぢや 「底清みは心底濁らず誠實なこと」流れては例の生存をかけよゝは、お
のがよゝなどいふよゝで男女同棲にいふものぢや すむは澄むに住をかけ
たので住も當時男女同棲にいふ詞ぢや ○人が問うたならあゝの白川のしら
ぬとばかりいふまい わしが心の底は清く實意でながらへて永く夫婦と
して一所に住まうと思ふから、

とものり

したにのみこふれば苦し玉のをのたえて亂れむ人な咎めそ
「玉のをのたえてにかゝる枕ぢや」ぐるしといひみだるといふは皆其縁語
亂れは緒がたえて玉が亂れるとまでいふ意ではない 「たえては」緒の絶ゆる
に副詞の「たえて」をかけたので 副詞の「たえて」は一向に「いふこと」當時の詞
ぢや ○内心でばかり戀しがつて居ては苦しくてたへられんむしろ打出し
て一向に思ふまゝにふるまはん人々あやしみとがむるな、
我戀をしのびかねては足引の山橋のいろに出ぬべし
「しのびかねては」こらへかねたらばの意 たらばをてばといふは當時の詞
づかひぢや 「山橋」は、數柑子のこと 「足引の山橋」は五の句の序ぢや ○わ
しが戀の思を「今日」までは包みこらへて居るがもしこらへかねたらば「長い
月日の間に」形にあらはれる事であらう、

よみ人しらず

大方は我名も湊こぎ出なむよをうみべたに見るめすくなし

船にたとへていうたので、船が港から沖に漕出で海松布を取るやうに、我名も世間に打出して願みぬやうにせよう、世間を憚つては逢見の事が稀なるからといふので、「よをうみべたはこゝでは世間を憚ることはいふ世を倦み厭ふと云ふではない。〇一向にわしが名も船の湊から沖に漕出するやうに世間に打出してかまはぬ事とせよう、世をうみべた即ち世間を憚るには見る目が稀ぢやから、

平、貞、文

枕より又しる人もなき戀を涙せきあへずもらしつる哉

「枕より」は枕より外にはの意。枕は打任せて戀を知りをもつものとしてよんだぢや。「もらし」は涙をもらすと、顯はれるとをかねていふ。〇枕より外には又と別に知つて居る人もない、わしが此戀を涙をふせぎきれないで、つひにもれ顯はれてしまつたかいナア、

よみ人しらず

風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり

此歌はある人のいはくかきのもとの人まるかなり

上の句は序で例のこれも何かの意味があるのぢや。假令へば人の言を聞いて、わが思ふ人の我を怒りたるか、恨みたるかといふやうな事でもあるらしく思はれる。「松なれや」のれやは、詞詠、ねにあらはれては、松の根が顯はれるを、聲に立つるをかけたぢや。〇風が吹き立てば、浪がうちよせる海岸の松ぢやらうかい。根があらはれる、いや、ねにあらはれ即ち聲に立て、泣きさうに思はれる、といふので注は例のとるにたらぬものぢや、

池にすむ名ををし鳥の水を淺みかくるとすれど顯れにけり

上の句は、かくるといふにかゝる序ぢやが、其かくるゝは名を惜しむからの事ぢやから、序中、名ををし鳥とかけていひ、さてかくるとうけて應じたぢやと古人のいはれたは、とかうない説ぢや。かくるは即ち人につゝみかくすこと、〇あれあの池にすんでをる名を惜しといふをし鳥が、池水が淺くて人にしられまいと、かくれやうとしたけれど、とうく見あらはされてしまつたわい、

逢ふ事は玉の緒ばかり名の立つは吉野の川の瀧つせのごと

「玉の緒はこゝもしばしの意即ちちよつとぢや 吉野の川の流つせはたぎり
流るゝ川瀬の事で音のかしましきにとる即ち風聞のやかましいぢや わづ
かなるものと仰山なものをかけ合せたが、あやぢや 此歌は萬葉のさぬら
くは玉のをばかり戀ふらくは不二の高根の鳴澤のごといふをすこしかへ
たばかりぢや」と古人もいはれた ○逢ひ見ることは玉の緒のやうにちよつ
とばかりで、さてうき名が立つてやかましいのは、吉野川のたぎり流れる川瀬
のやうぢや、

村鳥の立ちにし我名今更に事なしぶともしるしあらめや

「村鳥のは、枕で群鳥は騒がしく立つからいうたもの 「事なしふは、事無しぶる
といふ事 何事もなきさまをよそほふ事即ちしらぬふりぢや、○群鳥の騒が
しく立つたやうに、世間にやかましく立たわしが名ぢやものを、今となつてし
らぬふりをしたとて詮があらうかい、

君により我名は花に春霞野にも山にも立ちみちにけり

正義に是は女の歌で、男のもとへやつたぢや、聊か恨んだ意があるといはれた

は卓見といふべきぢや 但し花に春霞は唯春の景をいひなしたのみで花に
意はないとあるは、従はれない こゝにいふ花は、即此集の序にいふ人の心花
になりけるとある花で、おだめき色このみといふやうの意なるを、やがて春霞
といふにつけて、春景にとりなしたのぢや さて花に春霞は、野にも山にも
立つの序として、いづ方となく一般にうき名の立つをいふたので、まことに調
のやすらかな歌ぢや ○君がためにわたしが名はあだしく色めさうつ
るひやすいあの花の、ホンニ其花に柳引く春霞の野ともいはず、山ともいはず、
どこにもかしこにも立ちみちて評判されるやうになつたわい、

伊 勢

しるといへば枕だにせてねし物を塵ならぬ名の空にたつらん
枕は寢室に用ふるものぢやから男女の間の事をも知るといふこと、當時言は
れた事でもあらう ねし物をは逢ひし夜の事 空にたつといふ事、無名の事
にもいへど、こゝはさうではない、廣く世に名のたつにいふぢや ○男女の間
の事を知るものぢやといふからして、枕をさへせんで逢うたものを、塵埃でも

ない名がかう廣く一般に立つた事よどうしたものか。

古今和歌集卷第十三終

古今和歌集卷第十四

戀歌四

題しらず

よみ人しらず

みちのくの淺香の沼の花がつみかつみる人に戀や渡らむ

陸奥淺香沼は、今岩代國淺香郡ぢや。花がつみは水草。上の句は序でこれも
遠い土地といふが、かつみるといふ間遠の事にひくぢや。「かつみるは、かつ
かつ見るで、即ちわづかに稀に逢見ること。○あの陸奥の國の淺香の沼には
花勝見といふ水草が生ずるとき、其花がつみの、かつく見る人、即ちたま
くならでは逢はれない人を、いつがいつまでかう戀渡つて居るだらう、とい
ふぢや、

逢見ずは戀しき事となからまし音にぞ人をきくべかりける

此歌の下の句のをははとあるべきぢや、といふ説もあるが、これは音にぞ人を
聞くべかりけるものをといふ意でけると大過去で結んだところに、自然もの

をといふ語氣かこもるのぢや ○逢見ないで居つた事ならばこんな戀しい事もないで有つたらう 關係がないよそ人としてサ、あの人も聞いて居るべきで有つたものを(なまじひに逢ひ見て後悔する、

三七二

つらゆき

いそのかみふるの中道中々に見ずは戀しと思はましやは

「いそのかみは枕詞 ふるの中道は大和國山邊郡ぢや 初二は中々にをおこす序ぢやが 此序のさまで思ふに古く逢見し人に年経て更に逢うて後によりみ送つたとか又は古く逢見た人に送つたとかいふらしい ふるの中道の詞がどうしても古いなかつたといふにかけたらしい ○年久しく経た古い中道の中々に却つて逢見なかつた事ならばかやうに戀しいと思ふ事があらうぞや (ないであらうのに)

藤原たゆき

君といへば見まれ見ずまれふじの根の珍げなくもゆる我戀

見まれ見ずまれは見るにもあれ見ぬにもあれで即逢見ると逢見ぬとの差別

なくの意「ふじのねの珍げなくは不二の山は平日常にもえて居るからめつらしげなくもゆるとか、つてさていつと言はず珍らしげなく平日戀にもえるといふのぢや 戀ひのひに火をかけたのぢや ○君とさへいへば見ると見ぬとの差別もなく、あの不二の山のやうに珍しげもなく、いつでも常にもえて居るよ、わしが戀ひは、

伊勢

夢にだに見ゆとは見えじ朝なく わが面影にはづる身なれば

是は逢うて後戀にやつれたかたちを恥づるからよんだ歌で「夢にだに云々は現在に勿論夢にでも人にまみゆると見ることとはせまいといふぢや 夢になりとも見たいといふのが當然の情であるに其反對にいふは深く其戀にやつれし貌を恥づるからぢや 朝なく わが面影は毎朝向ふ鏡のおも影といふこと 女は毎朝鏡に向ふ事定まつて居るものぢやから鏡といふ事は省いたぢや ○今は思ふ人に現在に勿論たとへ夢にでもまみゆると見る事はせまい 毎朝向ふ鏡でみるにも戀やつれて我ながらわが面影にはづかしくお

もふやうになつた身ぢやから、

よみ人しらず

石間ゆく水の白浪たちかへりかくこそは見めあかずもある哉

初二の句は立かへりの序ではまを流れゆく水が岩にあたりて立かへるさまが見るにあかずおもしろいといふ意がひくぢや。さて戀の方のたちかへりは又引かへし再度といふ意に用ひたぢや。○あのいは間を流れて行く水が岩にあたり白浪となつて立かへるやうに。又再び引きかへして斯様にして逢ふ事としたいものぢや、どうもマアあかないわい。

伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふ見るめに人をあくよしもがな

「朝な夕な」といふ詞はもと朝菜夕菜で朝食の菜夕食の菜といふ事であると遠鏡にある通りぢや。さて後に轉じて毎朝夕の事にいひ又前の歌のやうに毎朝といふをあさなくともといふやうになつたので此歌のは眞實の朝菜夕菜ぢや。菜魚の類副食物をなといふは古言ぢや。かづくは水にくぐり入る

こと上の句は序で例の此の序の朝な夕なにかづくといふよりみるめとうけて、さて飽くといふのぢや。○伊勢の海の蟹が朝菜夕菜にせうとて浪に入つて取るといふ海松布よ。其見る目に人を腹十分に飽く程まで逢見る事にしたいものぢやいな。

とも のり

春霞たなびく山の櫻花みれどもあかぬ君にもある哉

上句は序で例の人目などにかへだてらるゝ意がひくぢや。○あれあの春霞が棚引いてかけへだてられてをる山の櫻花のみれども、どうもあかないやうに見てもみても、どうもあかれない君でマアある事かいな。

ふかやぶ

心をぞわりなき物と思ひぬる見るものからや戀しかるべき

「わりなしはこゝでは理窟がたぬといふ程の意に用ひた。下句のものからはものながらで、かく逢見て居ながらぢや。即ちかく逢見て居ながら戀しかるべき筈でないのに戀しいといふのはの意ぢや。戀しかるべきとつよくお

さへた言外にのに戀しいのは、といふ意が自然ひくのぢや。○心をサわし
は理窟が立たないものぢやと思ひこまれる逢はないならば戀しからうかく
逢見て居ながら戀しかるべき譯はならぬに戀しいのは

九河内みつね

かれはてむ後をばしらて夏草の深くも人の思ほゆる哉

「かれはてむは人の離れを草の枯れにかけたぢや 草にかけたは夏草のの枕
詞に依てぢや ○かれてしまふ後の事をば思はないであれあののび立つた
夏草のやうに深くマアあの人の事が思はれる事かいな、

よみ人しらす

あすか川淵はせになる世なりとも思ひそめてん人は忘れじ

明日香川は淵瀬が變じやすい川に古來いひ來つて人世の變ずる事によそへ
てある 此歌でも人世の轉變する事に用ひたのぢや 「思ひ初めてんは思ひ
そめたらんといふこと 忘れじと未來で結ぶからこれもてんと未來からい
ふのぢや ○あのあすか川の淵が忽ち瀬にかはるやうにどんなに世の中が

變る事となつても一度思ひ初めた人であらうからは決して忘れまい、

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にはあるらむ

○草木の葉は秋になれば色が變るものぢやがわしが君を思ふといふ言葉は
かりは秋を経たとても色が變らぬものといふべきであらう、

題しらす

さむしろに衣かたしき今宵もや我を待らむ宇治の橋姫

「さむしろはもと狹席で廣席長席と對するものぢやが後にはすべて席の事に
いふ事となつたので即ち敷物の事ぢや 衣かたしきは獨寢の丸寢をすれば
我衣の片々がしかれるからいふと、打聽にいふ通りぢや 宇治の橋姫といふ
には種々説があるが何れも確でない 其中で、宇治の橋姫で宇治に居る思ひ
妻といふ打聽の説がおだやかやのやうではあるが證據がないから只先にも
角にも思ひ妻の事をいうたものと見ておく外はないぢや さてさむしろと
いふ詞のうちは何となく獨寢の寒げなるやうなる情がこもつて妙があるぢ

や、○獨寝のさみしい數物の上に衣を片敷いて、今夜も亦大かた、わしがくるか
く、と待ちて居るであらう、わしが思ひ妻のあの宇治の橋姫は、

又はうぢのたまひめ

君や來む我やゆかむのいざよひに横の板戸もさゝずねにけり

「いざよひはどうかと躊躇すること、こゝではそれを體言にしてつかう
たのぢや○君が來るであらうか、しかしわまりおそいからわしが行かうかど
うせうかの躊躇のまぎれに、ツイ聞の戸もさゝないで寐てしまつたわい、

そせいほうし

今こむといひしばかりに長月の有明の月をまちいでつる哉

「今こむは今ツイすぐにゆかうといふ程の詞、受身からいふ故來んぢや、い
ひしばかりには言うたがためにといふ程の意、長月の云々は九月即ち今の
十月の末は夜の長い時分ぢや、有明の月はすべて朝に残る月をいふが此歌
ではいづれ廿日後の月と見えると古人も申された、偕此歌今こむというた
其人は來すとも又は待ちもせぬ月を見たとはいはないで、自然に其意が明か

にしられる處が妙なである、○今ツイすぐに來やうというたが爲に、此夜の
長い長月の更けてから出る有明の月を待つともなしにとらゝ待出した事
かいナ、待つた人は來もせんで

よみ人しらす

月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たりまたずしもあ
らず

「月夜よしは、よい月夜といふこと、夜よしは、よい夜で、風がないとか、又は夜氣
が爽かとかいふこと、こてふに似たりは來よといふに似て聞えんとのこと
またずしもあらずは、待たないといふでもないぢや、實は待たずしもあ
ずどころか深く待つのであるのをかく淺らかにいひなしたのがおもしろい
のぢや、○今夜はよい月夜であるよい夜であるとの人のところへ告げて
やつたならば、いかに來よといふやうに聞えるであらう、がしかし待たな
いといふでもない(からとに角言うてやらう)

君こずは聞へも入らじこむらさきわが元結に霜はおくとも

是は女の歌であらうと先哲も多く申された通り歌がらに依て全く女と思はれる 元結は髪をゆふもの其色の濃紫なのちや ○君が来ない間は閨の内へも入ることはせまいかやうに外に立ちて居てよしや濃紫なるわしが元結に霜がおくことがあるにもせよ

宮城野の本あらの小萩露をおもみ風をまつこと君をこそまて

本あらは本だちのあらくしげからぬをいふ 小萩といふに二説ある木萩と小萩とちや 木萩は草萩の如く本よりは枝しげく生ひず本はあらしものちやから本あらしといふに叶ふといひ 又小萩の小は必ずちひさいといふ意ではなく小菅小柴の小と同じちやといふどちらでも聞える これも序歌で風をまつこといいて君をまつを起したのちやが 是も例の宮城野又は本あらの小萩などいふに何かの意を寓せたものと見えるが題しらすちやからわからん○あの宮城野の本だちのあらいこ萩に露がおいて枝がしなうて風の吹くのをまつやうにわしは君が来るのを待つてをるのちや
あな戀し今も見てしか山かつの垣穂にさけるやまと撫子

是は比喩の歌ちやが 歌がらに依てみるに方違とか何とかで一時假に山里に在る人に不意に逢見たとやうの事があつて借よんだらしい 今も見てしかの句は今見見る事が出来ぬ上からいうたらしいからである 山かつは山賤 かきほは垣根に對する名ちやが轉じてひろく垣の事にもいふのちや ○あゝどうも戀しい今もあの時のやうにどうぞ見たいものよ あの山賤のやつれた垣に思ひもよらず咲匂うたやまとなで子のうるはしかつたあの花をどうしたならみられやう

津の國のなには思はず山城のとはに逢見む事をのみこそ

難波に何をかけ鳥羽に常磐をかけたのちや 事をのみこそは言ひさして願ふといふ意を含めたのちや ○攝津の國にあるといふ何は思はぬ只一向に山城の國のとはといふ常にかはらず逢ひ見るといふ事をサ(わし)は願うて居るのみちや

つらゆき

敷島のやまとははあらぬ唐衣ころもへずして逢ふよしもかな

敷島の「はやまとの枕詞」やまとははあらぬは唐といはんため さて唐ころもとかかりてころもへずしての序としたところに自然と彼からそれにそれからこれにと逢見る機会を得るやうなる句ひが生ずるのちや ○敷島のやまとの國ではない唐ころもの其頃をも経ないで常にたびく逢見るやうにしたいものである。

ふかやぶ

戀しとはたか名けしむ事ならむしぬとぞたゞにいふべかりける

戀の情の切なるからに死に入る程戀しいをいうちや ○戀しいといふは何人が名つけた事であらういつそ死んでしまふと一向にいふべき事であつたのに實にわしは死ぬほどに戀しいから

よみ入しらす

みよし野の大川のへの藤浪のなみに思はわが戀ひめやは

大川のへは、大川の邊で即ち吉野川の沿岸ぢや 藤浪のなみには、なみにをおこ

す序でこれも吉野などに關係があつて序としたものと思はれる ○あの吉野川の岸に咲いて居る藤浪のなみ大低に思ふ程の事であるならば、わしがかやうに戀ひ慕ふ事があらうぞや、

かく戀ひむ物とは我も思ひにき心のうらぞまさしかりける

○かほどまで甚しう戀しがる事であらうとは、わしも最前から思つた事であつた心のうちで占なうた事が、全く確實で有たわい、

天の原ふみとゝろかし鳴神も思ふ中をばさくるものかは

是より以下の四首は、世に言ひ妨げられるについての歌で、其内此歌は世間に高くいひ騒がれるを雷鳴についていうたものぢや、と正義の説ぢやが、至極である ○天を踏みといるかしなりひいく雷には、何事もさしおかれるものぢやが、其雷でさへも相思ふ中をば避けるといふ事が出来やうぞや、出来はせまい、別して人が彼是いうたどて避けられるものから)

梓弓ひき野のつゝら末つひにわが思ふ人に言のしげけん

梓弓は枕詞 引野は河内國の地名 つゝらは蔓草かづらといふと同じぢや

初二句は未つひにしげしといはん序で、是も何か寄せる所があるらしいが、
題しらすちやからわからない。さて引野といふが自然つゝらといふにひい
き合つておもしろく聞えるちや。○われあの引野の野原にはひまつはれて
居る蔓草の末がだんくはびこり行きて茂りまつはるやうに。わしが思ふ
人の身にもかれこれの評判が茂くいひはやされる事であらう。

此うたはある人あめのみかどのあふみのうねめに給ひける
となん申す

此注次の注とも後人のさかしらちや

夏引の手引の糸をくりかへしことしげくともたえむと思ふな
夏引の手引の糸は繭糸のこと。くりかへしにかゝる序でたえむは其縁語ち
や。○夏引の繭糸を手引に引出すやうに繰返しくして人の彼是いひ妨げ
る詞はいかやうにしげく多からんとても其爲に中絶えうなどは必ず思ひ
玉ふな。といふのでくりかへしは人のいひ妨ぐる詞をいふことしげくに
いく詞ちや。

此歌はかへしによみて奉りけるとなむ

里人のことは夏野のしげくともかれゆく君にあはざらめやは
夏野は草の茂きものちやからしげくといはん爲におき。借其縁語でかれゆ
くといふので。かれゆくは遠ざかり行くこと。三四句の意はしげくてかれゆ
くとも君にといふので。即ち人言がしげきによりてかれゆくとても君にあ
はずしてはおかぬとの意ちや。○世間の人の彼是いふ詞が夏野の草のやう
にしげくて君はそれが爲に遠ざかりゆくとてもわしはどうしてもわはずし
てはおかないちや。

藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひしり
てふみつかはせりけることばに、今まうてく雨のふりけるを
なむみわづらひ侍るといへりけるをきよて女にかはりてあ
りける

在原業平朝臣

かづくに思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされ

此詞書も例の後人のさかしらに作り加へたもので、もと題しらずとか何とかあつたものであらうと正義に言はれたは卓見の説ぢや、依つて此歌を解くには全く詞書をすて、歌にみえて居る旨に依て言はねばならぬ。歌に見えて居る旨に依て見れば雨のふる日女の許に詠んでおくつたものと思はれる「かすく」には深切にといふ意と遠鏡にいはれた通り「思ひ思はずとひがたみは深く思ふから訪ひ深く思はぬから訪はぬとでなく思ふと思はぬとは別なく訪ひがたくてといふ事、身をしる雨は、當時にいはれた詞で涙のこをいふ、自身の愛さを感じて出づる涙でそれを雨にあやなしていうたぢや。○深く懇に思ひ思はずの差別なく、今日はいかにしても訪ふことが出来ぬから身をしる涙の雨は、まことの雨よりもサ更に降りまざる事である、ある女のなりひらの朝臣をところさだめずありきすと思ひてよみて遣はしける。よみ人知らず

れ

秘の時の大麻は多くの人がわれもくと手を出して引くものぢやから引く手あまたといふぢや。○大麻のやうに君はコ、かしこから引手が澤山あるからして、わしももとより思うては居るけれどもようサ願ひことは出来ませんよ。なりひらの朝臣

大ぬさと名にこそたてれ流れてもつひによるせはありてふ物を

「流れても云々は、大麻は川に流すもので、流れて依る瀬があるといふを、よしや引手あまたなりとも、終に依るべき妻は其許ぢやといふ意に用ひたのぢや。○大ぬさなど、名をつけられて言はれもサせうが、其大ぬさは川に流れてゆぐやうでもつまりよる所の瀬はあるものであるとさいて居る、其よる瀬は誰であらうか、

題しらず

よみ人しらず

須磨のあまの鹽やく烟風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり
 「風をいたみは風が甚しくてといふこと、これに牽制せられた意を寓したぢや、思はぬ方は意外の方角で、之にわが思ひ人が他の意外の人にうつるを比したのぢや、〇あの須磨の浦の漲が鹽をやく烟が風が甚しくて思ひもつかぬ方角に打なびいた事わい、丁度わしが中のやうにといふので、是は序の註にも引かれた歌で比喩ぢや、」

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし

玉かづらは葛ぢや、是も比喩で、絶えぬは葛の縁語ぢや、〇葛があの木にも、此木にもはひまつはる木が多くなるやうに、思ふ人があちらにもこちらにも通ふ事ぢやから、わしの方へも絶えず常に通ひ來はくれど、別にうれしいとも思はれない、

たが里に夜がれをしてか郭公たゞこゝにしもねたる聲する

是は歌のさまで思ふに久しく疎かりし人の來りて去らんとする時の詠みか

けたもので其時節ゆる郭公によせていうたものらしい、「よがれは訪はぬ夜の事、偕此歌全體の結構其久しく疎かりしを本として、今は他に心を移して我方には來らぬものと定めたる意よりわざとくしげに詠んだものとみるべきぢや、〇毎晩通ふどこかの里に、一晩夜がれをした郭公であらう一向に珍らしく此場所に於て一晩泊つたやうな聲がするのは、ハテ珍らしいいで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして

いでは發語の聲音で種々に用ひられる詞ぢやが、こゝでは遠鏡にある通り、イヤモウといふ程の意ぢや、「月草のはうつし心の枕詞、うつし心は移りやすくあだくしい心のこと、色ことにしては、色殊にしてで、色が一際深く即ちあだ心が甚しいのぢや、〇イヤモウ人といふものは詞ばかりがサ結構にいひまはし、深切らしくいふが、あの月草のうつり易いあだくしい心は色が特別深くして、忽ちかはり變ずるものぢやのに、」

偽のなきよなりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

〇うそ偽といふものがないといふ世の中であつたことならば、どれほどまで

に人のいふ詞がうれしい事であらう、うそがある世ぢやからいふ事があてに
ならぬ)

偽と思ふものから今更にたが誠をか我は頼まむ

下の句は他人と契を結びかへて其誠を頼まんとする如き心はないといふぢ
や〇うそ偽ぢや、もとより頼むべきでないとは思ひながらさればというて又
今更に他人と契を結びかへて其誠を頼まんとするやうな心は決してない。

素性法師

秋風に山のこのはのうつろへば人の心もいかゞとぞおもふ

〇秋風が吹いて山の木の葉がちつてゆくを見るにつけて人の心もどうであ
らう、うつろひ散つてしまふ事はあるまいかと心配せられてたまらぬといふ
ので、うつろふといふは色の變するにも又散ることにもいふといふ事は春
の部のくるとあくとこの歌でお話し申しおいた。

寛平のときさいの宮の歌合の歌

とも のり

蟬の聲きけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば

此歌は諸説いづれもむつかしく解いてあるが、さやうにこみ入た事ではない
心に憂がわれれば見聞くものが皆悲しく感ずるは人情ぢや、故に人の心が
變らんかときづかふ時蟬の聲を聞いて悲しく感じ、さて其時節なる夏衣を枕
詞にしてうすくやといひおろしたのみぢや、秋風が立つとか夏日は人が疎
くなるとかいふやうの事は歌の上にはすべてみえぬ説である。〇あの蟬の
なく聲をさけば何とはなしに悲しくおもはれるよ、此きて居る夏衣のやう
にあの人の心がうすく變つてゆかうかと思ふから、

題しらず

よみ人しらず

空蟬のよの人ことのしげよれば忘れぬものよかれぬべらなり

〇あれのこれのと世間の人の噂がとかくにやかましいから互に心には忘れ
ないもの、自然と遠ざかるやうになりさうである。

あかてこそ思はむ中ははなれなめそをだに後の忘れがたみに

是はとてもかくても末の遂げられぬ契から詠んだものぢや、忘れがたみは、
忘れ難いといふを形見といふ名詞に言掛けて、一種の名詞となつたもので、そ

れを見れば忘られぬ形見といふ意ぢや。○とても末の遂げられぬ契なるか
らは互にあきもあかれもせぬ程にサ相思ふ間は離別すること、せやう
めてそれだけでも後々の忘れがたみにするたためにといふので三の句六帖に
は、わかれなめとある。

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけに先ぞ悲しき

是は人の我を忘るべき機あるを見て我より先づ彼を忘れんと思ひたつぢや
物思ひを忘れうとするではない。けには殊にで殊更別段にぢや。○むし
ろこなたからして忘れてしまはうとの心を定めるについて。是までよりも
殊更別段に、先づ何となく心細く悲しく思はれる、此分ではどうも忘れてしま
ふことはむつかしうぢや。

忘れなむ我を恨むな郭公人の秋にはあはむともせず

是も前と同じで先方の我を忘るべきけしきを見て我より先忘れんといふぢ
や。郭公は秋にあはぬといふ爲におく枕ぢや。○先づわしの方から忘れて
しまはう、それはそなたの心からの事ぢや。からわしを恨み玉ふな、わしはあ

絶えずゆく飛鳥の川の上よどみなば心ありとや人の思はん

の郭公の秋にあはぬやうに人にあきらるゝ秋にあはうとはせぬ事である。
是は萬葉の「絶えずゆく明日香の川の上よどめらば故しもある」と人の見らく
にといふ歌の轉じたもので。初二句は序ぢやが絶えずゆくといふに常に通
ふといふ意がひくぢや。○平常絶えず行き通ふ飛鳥川の川水がよどんで
行き通ふことが滞ふる事が有たならば「已むを得ぬ」はりがあるにも拘はら
ずあだし心があるやうに人の人は思ふ事でもあらうか、

此歌ある人のいはくなかとみのあづま人が歌なり

淀川の上よどむの枕詞におきさてそれに依て流れといひ深きといふ縁語を

用ひたのぢや。よどむは通ふ事のすこし滞るにいふのぢや。○わしが此程
しばし行かぬをあの淀川の上よどんで滞りが出来た事とあの人は思ふ事でも
あらうが、わしは生存へて末長くそいとげやうとする深い情があるものぢや
のに、

医 藥 抄

素性法師

三九四

そこひなき淵やはさわぐ山川の淺きせにこそあだ浪はたて

「そこひなきは底の限のしれぬをいふ」あだ浪は瀬などに激してさわぐ立つ浪で、うは浪といふと大方同じや。既に素性集や六帖にはうは波とみえてをる。うは浪あだ浪の差別を立ていふ説はよくない。俗此歌は比喩や。○底の限もしれぬ程の淵に浪の騒ぐやうの事があらうぞや、決してない山川のやうな水の淺く流れるところはサ瀬にあたりなどしてさわぐし。たあだ浪が立つものぢや（それと同じでわしは心の底に深く思うて口には言はぬ、口でちやほやさわぎ立てるは、つまり淺いからである。

よみ人しらす

くれなるの初花ぞめの色深く思ひし心われ忘れぬや

「紅の初花染は紅の花の最初に咲いた花を摘んでそれで染めるをいふ」すべて花よりする染料は最初の花が色のよい中にも紅は殊にさやうぢやから、花深くといふて深くの序としたのぢや。○紅の花の初花で染めた色のやうに、

深く思ひ込んだ最初の心はいつまで立つともわしは決して忘れやうものか、忘れる事はなす。

かはらの左大臣

陸奥のしのぶもぢすり誰故に亂れんと思ふ我ならなくに

初二句は古昔陸奥の國信夫郡からしのぶもぢすりと名けた摺布を出したもので、其摺りたる模様は髪を亂したるやうにもぢれ亂れたるからにもぢ摺といふとの事ぢや。さて左様に亂れたるものぢやから亂れんと思ふの序としたのぢや。さて前の「そこひなき、又紅の」の歌いづれも人の言に應じて詠んだもので、此歌も人の我を疑つてあだし心のあるかのやうにいふに應じた歌であらふと古人が言はれたは至極の説ぢや。○あの陸奥の國から出る信夫もぢ摺は、右左と亂れて居るが、誰の爲めにもあのやうに亂れうとするわしぢやない、君の外には誰にも亂れぬ。

よみ人しらす

思ふよりいかにせよとか秋風になびく淺茅の色ことになる

初二句は是程に思ふ心は至極してあるに尙此上にとらせよとかといふ意
秋風になびく浅茅は序で例の人の心の變らんとするにも拘はらで、我は從順
なるとやうの意がびいくぢや ○かほどに深く思ふより上に尙どうせよと
てか、あれあの秋風のふくがまゝに打靡く浅茅のやうに色がかはりて様子
らがちがふであらう、

ちゝの色に移るふらめどしらなくに心し秋の紅葉ならねば

○人の心のわたくしは種々様々の色に變じかはる事であらうけれど、そ
れは目には見知られない其心が秋の紅葉の類でないから、

小野 小町

蟹のすむ里のしるべにあらなくにうらみむとのみ人のいふら
む

「しるべ」は此歌では案内者といふに用ひたぢや 浦見んを恨みんにかけたぢ
や ○蟹が住居して居る村里の案内者でもないものを毎度うら見んうら見
んとばかり、あの人はいふであらう事よ、あゝわからぬ)

しもつけのをむね

くもり日の影としなれる我なれば目にこそみえね身をばはな
れず

「くもり日」は影の枕詞で此枕詞をはたらかして目にこそ云々といふたぢや
影となるといふことは前の戀すればの歌でお話し申した ○曇り日の影
否君を戀うて朝影のやうに瘦衰へたわしぢやから、くもり日の影のやうに目
にこそはみえないがちよつとの間も君が身をば離れない、

つらゆき

色もなき心を人に染めしより移ろはむとはおもほえなくに

○色あるものはうつるといふ事あれど色もない心を人に染めた事ぢやから、
いつまで立つてもうつろひ變らうとは思はない、

よみ人しらず

珍しき人を見むとやしかもせぬ我下紐のとけわたるらむ

○久しく逢はぬ珍しい人を逢見るべき前兆でか、さやうにもせざるわしが下

紐がするく〜とわけなしに解くる事であらう」といふでとけわたるは其忽ち
に解けるさまをつよくいふのぢや。

かげるふのそれかあらぬか春雨のふる人なれば袖ぞぬれぬ
る

是は四の句六帖頭昭本等にはふる人みればとありて其方よしと先哲いづれ
も申しおかれた。「かげるふの」春雨のにも枕詞で 此歌は年來を経て昔逢
見し人に逢うた處がふとみては其人とも見分けられぬ程面がはりなどした
をよんだもので枕詞は即ち其逢うた時節の物ぢやらうと、是も先哲の説ぢや
○かげるふの、それであるか、それではないかといふやうにふと見ては疑は
れる程面がはりがした 春雨のふるいなじみの人を逢ひ見れば昔の事が思
ひ出されて涙で袖がサひとくぬれた。

堀江こくたなよしをぶねこぎ返り同じ人にや戀渡りなむ

「たななし小舟は、大船には船棚を設けるが、小舟にはそれが無いので、即ち小船
といふ事ぢや」「こぎ返り」といふに昔逢見たる人に立返つて契をかはずをか

けたぢや ○あの堀江を漕ぐ棚なし小舟は漕いで出ては、又漕いで返り同じ
堀江を往來するが、わしも又かう立返つて昔の同じ人と又も契をかはして
相もかはらず戀渡る事であらうか、

伊 勢

わたつみとあれにしとこを今更にはらは、袖や沫とうきなむ

是は後撰集伊勢集等にある歌で 枇杷左大臣が宵のまにはや戀めよいその
かみふりにし床もうちらはらふべくとよみかけられた返歌ぢやが、こゝにはさ
るべきよしが有て題しらすの歌とした事とみえる 借床をはらふといふは
もと床の塵をはらふといふ事ぢやけれど、當時は打任せて床をはらふとばか
りいうて男女同寝の事にいふ事となつたぢや 即ち此かけ歌にもふりにし
床も打はらふべくといひ、又、はらはぬ床といふ詞もあるので明かぢや 又此
歌の初二句涙といはないで、突然わたつみとあれにし床というて、自然と涙を
聞かせるところが上手の手段ぢや ○戀ひ慕ふ涙で和田津海の如くわれは
てた床を、今又更にはらはうとしたならば、袖は忽ち涙の海の沫と浮いてしま

ふ事であらう(から)とても拂ふ事は出来ませぬ

四〇〇

つらゆき

いにしへに猶立返る心哉戀しきごととに物忘れせて

此歌も古來十分に解し得た説がない「戀しきごとには戀しき毎にで戀しく思ふ度毎にちや戀しき事にはない」「物忘れは過去の事ちやと思ひ捨る事すべて過去つた事は何事によらず氣にかけず思ひ捨てるものぢやが、それを思ひ捨てないで猶思ひつゝけるが、物忘れせでちや言ひかへればあきらめがつかないでちや。○まだ中が絶えなかつた以前に猶ふと立返つて考へられる心でもあるわい。あの人を戀しく思ふ度毎にとかくあきらめがつかないで、

人をしのびにあひしりてあひがたくありければその家のあたりをまかりありきけるをりに雁のなくをきよてよみてつかはしける

大とものくろぬし

思ひいでゝ戀しきときは初雁の鳴て渡ると人しるらめや

「初雁のは其時の景物を即ち枕としてなきて渡るにかけたぢや。わたるは此時代通行する事にいふた家の前を通行するをまへわたりといふた類ぢや。なきて渡るは戀の方では深く戀慕うて泣かんばかりに思ひ入て通行するといふ意ぢや。○考へ出して戀しさにたまらん時はあれあの初雁のやうになき慕うてこゝを通行するといふ事をあの人はしらうかい決して知るまい、右のおほいまうち君すまずなりにければかのむかしおこせたりける文どもをとりあつめてかへすとてよみておくりける

典侍藤原よるかの朝臣

右のおほいまうち君は右大臣すまずなるは男が女の家に来らすなること、即ち中が絶えたのぢや、

たのめこし言の葉今はかへしてむ我身ふるればおきどころなし

下の句は我身のおきどころがないといふに文のおきどころのないといふを
かけていうたぢや 文のおきどころがないといふではない ○未始終の事
を頼もしげにいろく言うて下されたお手紙をもはやお返し申しませう
わたしが身は古けてしまつておき場所もありませぬといふので 我身おき
どころなしの句がたのめこしと應じて深く其言葉の變じたを言外に咎めた
ところがおもしろいのぢや、

近院右のおほいまうち君

今はとてかへすことのはひろひおきておのが物から形見とや
みむ

言の葉といふからひろふとうけたぢや ひろふはしまひおく意ぢや ○も
はやというてかへしてよこされた此手紙どもをしまつておいてわしが書い
た物ながらそなたの形見とも見やう、

よるかの朝臣

玉ぼこの道は常にもまどはなむ人をとふとも我かと思はむ

是は近頃他の方へ常に通つて我が方へは疎くなつた人が珍らしく来たにつ
いて詠だ歌で 今も久しく來ぬ人に訪はれた時のからかひ詞にお門ちがひ
ではないかといふ類のいひなしぢや 玉ぼこのは枕詞でこれに借も珍しい、
是は定めて道に惑うたのぢやらうといふやうな意がひよくぢや ○イヤお
珍しい是は定めて道惑ひしての事でありませう どうぞ是から常にいつで
もく今夜のやうに道惑ひしてわしの處にお出でがあるやうにしたいさ
うしたならばよその人を訪ふ道惑ひでもわしを訪うてくれた事と思ひませ
う(が今夜は道惑ひと思ふ外はありませぬ)

よみ人しらす

待てといはゞねてもゆかなむしひてゆく駒の足をれまへの棚
橋

古調で面白い歌ぢや 棚橋は板を棚のやうにかけて柱がない小橋の事ぢや
○マア待つてというたならばとまつて寝ていきなさいな ふり切つて行
かうとする其馬の足をつまづかせて折てくれよ門前の棚橋よ、

中納言源のほるの朝臣のあふみのすけに侍りける時によみてやれりける

閑院

逢阪のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆきよをなくくも見ぬ

是は詞書にある通り昇朝臣が近江へ下るについて別れねばならぬからよんで贈つたもので 閑院といふは源宗于朝臣の女ぢや、〇わたしがもしも逢坂の關のゆふつけ鳥であつたならばサせめては君が往來の度々に鳴きながらも見ざる事だけは出来るであらうに、鳥でないからそれさへ叶はない

題しらず

伊勢

故郷にあらぬ物からわがために人の心のあれて見ゆらむ

故郷は舊都をいふ 舊都は荒れゆくものぢやから荒れるといふに取つたので、人の心の荒れるは他に心が移つて我にうとくしくなるをいふぢや 〇舊都でもありもせぬものぢやながらわしが爲には、あの人の心が、ひどうあれてさびしく見えるやうぢや、どうしたもののか、

籠

山がつかきほにはへる青つゞら人はくれども言つてもなし

青つゞらは防已、一名解離青かつらともいふとある、蔓草類ぢや 上の句は、人はくれどもの序で、例の何となしに山里あたりの人に對していふものらしく思はれるぢや 〇山賤がすみかの垣にはひはびこつて居る青つゞらは蔓をくるものぢやが、くるといふについては此邊へたびとそなたから人はくれども、わしのところへちよつとも言つてがないどうした事か

さかゐのひとぎね

大空は戀しき人の形見かは物思ふごとくに詠めらるらむ

心に物を考へ思ふ時は何となく空を打ながめられるものぢやから、それをよんだものぢや 〇あの空はわしが戀ひ思ふ人の形見であるか、形見ではあるまい (それぢやのに何故に物を按じ思ふ度々に、いつでもながめられる事ぢやらう、といふので、これは上の句と下の句の間に、さるに何なればといふ意がこもる當時の一つの格のある調ぢや、

よみ人しらず

あふまでの形見も我は何せんに見ても心の慰まなくに

是は又逢ふまでというて、戀人が置いていつた物についてよんだもので、それを形見といふのぢや。○又逢ふまでというて置いてゆかれた形見の物も、わしは何にしやうぞ。とんと何にもならぬそれを取出して見ても一向に心の慰む事もなく、却て戀しくおもふから。

おやのまもりける人のむすめにいと忍びにあひて物らいひけるあひだにおやのよぶといひければいそぎかへるとて裳をなむぬぎおきていりにけるを其後もをかへすとてよめる

おきかせ

逢ふまでの形見とてこそとよめけめ涙にうかぶもくずなりけり

裳は女の下袴の上にはくもの。女が親の呼ぶとき、裳を脱ぎおいた儘で親のもとへ入つたあとで、其裳を持ち歸つてきて後、それを戻しかへしたの

で涙の種となる裳ぢやから返すといふを、波に浮ぶ藁屑といひかけたので「もくずなりけり」と言ひ捨てたところ、それ故かへすといふ意が、おのづとしられるのぢや。○又逢ふまでの形見に見よというて、君は之を殘しておかれた事であらう。なれども之を見れば君の事を思ひ出して、却て涙の種となつて、浪だにたいよふ藁屑ぢやからお返し申すのぢや。

題しらず

よみ人しらず

形見こそ今はあたなれこれなくは忘るゝ時もあらましものを

わたしは讎敵で我に害を加ふる者にいふ名ぢや、今はわたしと濁つていふが、正しくは清音であたぢや。○此形見がサ、今日となつては却てわしが仇かたきとなつた事である。これがなかつたならば、せめて折ふしは忘れるといふ事もあるらうであるべきものを、これがあるから、ちよつとの間も忘られな。

古今和歌集卷第十四終

古今和歌集卷第十五

戀歌五

五條のきさいの宮のにしのたいにすみける人にほいにはあ
らでものいひわたりけるをむ月のとをかあまりになむほか
へかくれにけるあり所はきよけれどえ物もいはてまたのと
しの春うめの花ざかりに月のおもしろかりけるよこそをこ
ひてかのにしのたいにいきて月のかたぶくまであばらなる
いたじきにふせりてよめる

在原業平朝臣

此詞書も後人のさかしらに加へたものでもとは題しらすなど有たものぢや
らうと是も先哲の説ぢや 何さまさやうかもしらんが別に證據もない 唯
業平の歌といふと兎角詞書が長くて且伊勢物語の文に往々似て居るといふ

までぢやから儘にはいはれぬ 但しは言ふものゝ此歌はいづれにも此詞書に見えて居るやうな場合から詠まれたものと思はれるから、一通り此詞書をお話し申しおくのである 「五條の後の宮は、閑院左大臣冬嗣公の女で、仁明の皇后文徳の御母諱は順子と申奉る 西の對は、當時の建築には寢殿の東西に對屋といふがある、其西の對屋の事ぢや 「住みける人は、後の御姪の高子、後に二條后と申すをいふと言ふは、推量の説で、只そこに住んで居た人と見る外はない 「はいにはあらでは、熱心に思ひ込んだといふではなく、即ちふとしりあうたといふ意 當時熱心に思ひこむ事を「はい」というた事で出家した事を「はい」とげて「いふ類でもしられる 「ものいひわたりは、その女のもとに常に通ふたこと 「ほかへかくれにけるは、痕跡を没したのぢや 「あばらなるいたじきは、其人に住まざるやうになつたから、帷帳、建具の類を取はづして、餘然たるをいふ あばらは、亭をあばらやとよんで、四壁のない事 これから轉じて、荒廢の事にもいふ事となつたのぢや 板敷は、即ち女のもと住まれたところ、尙此委しい事は、伊勢物語大成にいうてあるいやそれはまだ版にはな

らぬが、せひ版にするつもりである。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

此歌は古求此古今集といひ、又伊勢物語といひ、注釋は數もしられぬ程多いが、どうしたものか、まだ適當の解釋を得ない、得ないのみならず、注釋に依て却てわからなくしてしまつてある 此歌は元來何もさほどにむつかしい歌ではない、一吟の下によくわかる歌ぢやが、畢竟船頭が多くて船を山ともいふべきである 先此歌を解くには、詞書の趣をよく味ひて、其時の光景を十分腹に入れて見ねばならぬ 去年其人の住んで居た頃は、此西の對の光景、人もいと多く、さらびやかに花やかに賑はしくいかに、もはやかなるありさまで有つたところか 今年來て見れば、唯一人の人影もなく、玉簾、几帳はいふも更で、建具疊の類ごとく、く取外され、一點燈火の光もない、あばら素堂の板敷に、月影寒くさし入つたるさま、全く去年の面影もなかつたのである 此に於て、今昔の感禁じ難く、忽ち此歌となつたといふ事を思はねばならぬ、〇月が去年ののではないか、どうも去年のとは思はれぬ 春が去年の春ではないか、どうして去

年の春と同じ物とは思はれぬ 唯わしが身一つ丈がもとの其儘の身で、其外は何もかもかはりはてたといふので かう見れば事もなくよくわかる歌で、誠に感情の深い歌ぢや 月やあらぬ春や昔の春ならぬのやは、問かけのやで、反語のやではないのぢや、

題しらす

藤原なかひらの朝臣

花すゝき我こそしたに思ひしかほにいてゝ人に結ばれにけり
花すゝきはほにいでゝといはんために、おいたもの ほに出づは表にあらはれてで、即ち表はれて人が縁を結ぶをほにいでゝ云々といふぢや 結ばれも花すゝきの縁語ぢや、〇われらがサゆくゝ妻ともせうと心の内で思つて居た事ぢやの、あの花すゝきのほにいでゝ、即ち表はれて他人に縁を結ばれてしまつたわい、ア、残念をした

藤原かねすけの朝臣

よそにのみきかましものを音羽川渡るとなしにみなれそめけむ

音羽川はわたるの枕詞で 二の句きかましといふから音とかけさて川の縁語水馴を見馴にかけたぢや 〇よそ外の人とばかり聞いて居るべかりし事なるを何故に音羽川の逢瀬を渡しとげるといふでもなく、戀意になり初めた事であらう、

几河内みつね

わがごとく我を思はむ人もがなさてもやうきと世をこゝろみむ

〇、わしが人を思ふやうな思ひこみで、人がわしを思つてくれるやうにしたい それでもやはり男女の中はういものであるか、どうかといふ事をためしてみたいといふので、我を思はん人もがなは他の人をいふではない、わが戀人の我を思ふやうにしたいといふので、もしそれならば、かやうにうい事はあるまいとの意ぢや、

もとかた

久方のあまつ空にもすまなくに人はよそにぞおもふべらなる

〇わしはあの茫々たる天外の空中に住で居るでもないのに人は全くわしをばよそ外のものと思つて居るらしい具合ぢや、

見ても又又も見まくのほしければなるゝを人はいとふべらなり

「ほしければほしきにといふ意で古き歌には此格が多いと遠鏡にいはれてある其通りぢや 〇わしは逢見ても又また、び又も逢見たく思ふのにそれとは反對で段々となれなじんでゆくを人は却て厭ふやうなやうすである、

きのともものり

雲もなくなぎたる朝の我なれやいとはれてのみよをばへぬらむ

此れやは反語のれやで我ならんやといふ意ぢや さて上下の間にさるに何故といふ意がひくぢや 〇雲もなくよく和きたる朝の我ならんやさうぢやのに何故にいとされてばかり月日を経過する事であらう 最晴れと厭はれとをかけたのぢや、

よみ人しらす

花がたみめならふ人のあまたあれば忘れぬらむ数ならぬ身は

「花がたみめ」といふにかゝる枕詞「目ならふは目慣ふで常に愛れ近づくこと 側近く手ならし親しむを目ならず」と當時いうたと同じ詞ぢや これを古來目並ふと説いて、目前に並ふといふは誤ぢや もし然らば目並ふ人のあればといふべきぢや あまたといはでも目並ふで既にあまるの意は聞ゆればぢや 是は當時目ならずといふ詞があるのが目慣ふといふに相違ない證である さて花籠の目は数が多いものぢやから数ならぬ身と結んで花籠の枕にひかせたのぢや 〇花籠の目慣ふ即ち常になれ親む人が多人數ある事ぢやから忘られてしまふ事であらう わしのやうに數にも立たない身はよきめのみおひてながるゝ浦なればかりにのみこそあまはよるらめ

浮和布に愛目 流るゝに泣るゝ 薙に假をよせて借蚤を思ふ人に比してい

うたぢや 畢竟假初に来るのみで實情がないから憂目を感じて泣かれる迄にも至ることぢやのを、かくいひなしたのぢや ○浮和布ばかりが生じて常にながれてをる浦ぢやからして、刈にばかりサ蚕はより来る事であらう。

い せ

あひにあひて物思ふ頃の我袖にやどる月さへぬるゝがほなる

「あひにあひては、すべてこれと彼とが偶然丁度に出で逢ふをいふ 物思ふ頃の我袖は涙といはないで涙を示したぢや 月さへは、我に對していふ、月までもぢや 「ぬるゝがほは其ぬれたさまを判明にいはないで、おぼめかしていふ 濡れるわんばい又は濡れた具合といふ位の詞ぢや ○偶然丁度に出で逢うて、物を思ふ時分のわしが袖は涙で濡れてをるが、其袖の涙に影を宿す月までもが同じく濡れる鹽梅にみえる。

よみ人しらず

秋ならでおく白露は寐覺するわが手枕のしづくなりけり

○秋は露がおくものぢやが、秋でもなくて置く白露は、物思ひのため夜も安眠が出来ないで夜半に目をさますわしが枕をつたうて流れる涙の半である

わいといふので 手枕はもと手を以て枕に代へるをいふより起つた名ぢやが、後にはひろく枕の名にもいふ事となつたのぢや。

須磨の蟹の鹽やき衣をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ

上の句は序で、蟹の衣を織る梭のあらきをいひ、さてまどほといふを起したの、まどほは織目の粗いを、間違にかけたのぢや 「まどほにあれや」は、遠鏡にいふ通り、道の間の遠くある故にやの意で、即ち思ひ人の住所と我が住所との距離が遠いのぢや 「君がきまさぬは、来る事の稀なをいふ事正義の説の通りぢや 来る事が遅いといふではない 借これも思ひ人が播磨に關係があると、又は海邊の人とかいふ事から例のやがて序としたものと思はれる ○あの須磨の浦の蟹の着て居る鹽焼衣は、あらい梭で織るものぢやから、織目が粗く間違であるが、其間違といふやうに、君が家と、我が家との間が遠く離れて居る故でもあらうかして、一向に君がおこしなさらぬ」といふので 「きまさぬ」

は衣の縁語ぢや、

山城の淀のわかごもかりにだにこぬ人たのお我ぞはかなき

是も初二の句は序ぢや 菰は水草でかつみとも花かつみともいふ わかごもは弱菰ぢや 菰は刈取るものぢやから假初といふにかけたので、これも淀に關係があつて序としたものであらう ○あの山城の淀のわか菰はかり取るものぢやが、それでなく、かりそめに來る人はもとより頼むに足らぬものぢやのを、かりそめにでも來る事のない人を頼むといふわしは、さらちもなくつまらぬ事である、

あひ見ねばこひこそまされみなせ川何に深めて思ひそめけむ

「みなせ川は何に深めての枕ぢや 水のなといふ水無瀬川の名を負ふ川なるに何に深めてぢや 古く水の事をこひといふからこひこそまされの詞をうけて、みなせ川の枕をおいたのがおもしろいのぢや ○あひ見ることが叶はんで居れば、きつうこひがサマさる事である 水のないみなせといふ名のゐるのに、何として深めてかやうに思ひはじめた事ぢやらう(今更後悔する)

曉の鳴のはねがきもよはがき君がこぬよは我ぞかずかく

「曉のはねがき」とは曉の羽たゝきといふ事で萬葉にも羽振鳴鳴とも見えて、はぶきは羽たゝきの事 鳴は羽たゝきを多くする鳥であるからいふ 「もよはがきは其羽たゝきを數多くする事 百は數の多きをいふ 曉になれば、鳴が羽たゝきを繁くするを曉の鳴のはねがき百羽がき」というたぢや 倍此下の句の「かずかく」といふ詞に就ては古人の説もさまざまあるが、何れも信せられない 是は友人中根淑氏の説が穩當のやうに思はれるから、今は其説に本づき、猶聊か愚按をも添へてお話し申すのぢや 中根氏の説は、此歌にいふ「かずかく」は、戀一に行く水にかずかくよりもといひ 又萬葉に「水の上にかずかく如き」とあるものとは詞は同くて意の異なるもの (此例は至つて多い、一二例を挙げれば「あまゆ」といふ詞耻つるにも、愛に馴るゝにもいひ 「なづさふ」は水にうかぶにも馴るゝにもいひ、「なづむ」は露霜などのおきたまるにも、行きなやむにもいふ類ぢや)こゝにいふは臥倦びて痴れもがくと即ちねてもねつかれず、輾轉反側する意ぢや、と依て按ふに、すべてかくといふ詞は身を助かし

活はたかかせるにいふ あがく(腕) すがく(巢) すがく(菅搔) みがく(磨) もがく(苦悶) ゑがく(畫)の類ぢや これらからおして思ふにいくたびとなくあちこち身を動かすやうのことを、此時代この時代がすかくといひしならんか さらばかくは濁りて、かすがくといふべきか 右みぎにあぐるあがく、すがくの類皆濁音であるからぢや かやうに見れば行水ぎょうすいにの、かすかくは清みて、讀んで字をかくといふ事 此かすがくは濁りていうてあちこち身を動かしてもかくことで 曉あけぼのの鳴なの「とか、つて」君がこぬよは我ぞかすがくとうけた言外げんがいにおのづから寝てもねつかれずねがへりなどするさまもしられるぢや (猶委しくは秋香雜考あきかぐらに申しておき升のぼり此歌は古い歌で、既に序文じぶんにも、曉の鳴のはねがきをかぞへとかゝれた位のものぢや けれどもかすかくといふ詞前ことばまへの二首の外は例證を見ぬから、今は中根氏の説せつに本づいて、お話し申すのである ○長い夜の曉方あけぼのになると、鳴が羽たゝきををして、いくたびとなく羽たゝくが わたしもサ、君が來ぬ晩ばんはねてもねつかれず、ねかへりしていくたびとなくあちこち身をもがき動かすよ、

玉かづら今はたゆとや吹風のおとにも人のきこえざるらむ

「玉たまかづらはたゆといふにかゝる枕まくらでもとはたえずとかゝるものぢやが慣用の上うへからたゆといふにもかけたのぢや 吹風ふかかぜのおとの枕 玉かづらは葛くわで、葛は風をうけ旨あじいものぢやから、其縁そのえんで吹風を枕まくらに取つたぢや おとにも云々は音信おんじんのないをいふ ○玉かづらの今はもはや絶えやう即ち縁えんを切らうとの事ぢややら、吹風のおとづれも人のせぬ事でもあらうかしらぬ、

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君が心に秋やきぬらむ

袖そでの時雨しぐれは涙なみだをいふ 秋あきに飽あをかけ 秋といふに依よて時雨とあやなしたのぢや ○わしが袖そでに早はやでまはしに、時雨のあめが降りかゝるといふは、君が心のうちに飽あが來きて淋しみしい情じやうがみえるからであらう、

山の井の淺き心も思はぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ

「山やまの井いは淺あきにかゝる枕まくら さて其縁語そのえんごで影かげばかり云々といふたのぢや ○山やまの井いのやうに、淺あい心をわしは思おもうても居ゐらないのに、いつでもここ影かげばかりを見せて、一向人いっかうじんのとまらんのは、どうした事ことぢやらうといふので、影かげばかり

りのみののみはいつでもの意で遠鏡の説がよい之を撃つた説もあるがそれは却てよくない。

わすれ草種とらましを逢事のいとかくかたき物としりせば

○かねてから忘草の種を取りおいてそれを蒔くやうにすべき事であった逢ふ事がかほどまでにむつかしくでき難いことゝ知つた事ならばといふので逢ふ事が難いので切なる情がいかにも甚しく苦しいのをいふたのである。戀ふれども逢ふ夜のなきは忘草夢路にさへやおひ茂るらむ

前の歌の忘草は我が人を戀ふ情の上にて云ひ此忘草は人の我を忘れる上に就いていふのぢや逢ふ夜は夢に逢ふ夜で實際をいふではない。○戀しく思ふけれども夢の上でも逢ふと見る事のないのは人の心の我を忘れる忘草が現在ばかりでなく夢の道路にまでもはえ茂るからの事でもあらうか。

夢にだに逢ふこと難くなりゆくは我やいをねぬ人やわするよ

夢に人を見るは人の心が我に通ふからであると同時に當時はいはれて居たのぢやからして前の歌も此歌も其意からいふのである。○夢の上でさへ逢ひ見

るといふ事が出来がたく成つてゆくのはわしが物思ひで安眠が叶はぬ爲の故か又は人の心が變つてわしを忘れる爲の故か。

けんけい法師

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬ中ぞはるけかりける

○遠い唐土を夢ではちよつとの間に行つて見られて思ひの外に近かつたして見ると思はない中ほどサ遠いものはない事であるわいハテ夢にも見るといふ事がないから

さだののぼる

ひとりのみながめふるやのつまなれば人を忍ぶの草ぞおひける

「ながめふるやは長雨降る屋に永目経る家をかけ つまは軒の端をいふ、それに夫をかけさて霖雨には古い軒には忍草が生ずるものぢやから人を忍ぶの草が生ずというて一人でながめて人を忍び慕ふにかけたのぢや○唯一人でばかり淋しくながめふる屋のつまであるからして人を忍草が生ずる事であ

僧正遍昭

我宿は道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

「道もなきまで」は、草などが深く生茂つて踏分けられないをいふ。「まつとせしま」には「今日」はくるか、今日「はくるか」と心まちにまちつゝある程にといふこと。只其宿のあれたをいうて人の疎いをしらせたが面白いのぢや。○わしがうちの庭は草が生茂つて踏分けの道もない程に荒れてしまつたわい。同情のない人を、今日「はくるか」明日は来るかと毎日「く心まちに待つて居る程にいつかどうかかやうに」

今こむといひて別れしあしたより思ひくらしのねをのみぞな

「今こむ」は即越来べしといふにも又近日来べしといふにも用ひられた當時の詞で、「前の今こむ」といひしばかりには、即越この歌のは近日ぢや。思ひくらしして泣くといふを、蜘蛛の鳴くにかけたぢや。○ツイ今直近日に来やうといふ

て立別れた朝からして毎日々々どうしたらうと思ひ暮して蜘蛛のやうにねばかりないてをるといふので。蜘蛛の聲は何となく人のうら戀しいやうなもの、それらの景も匂ひ合つて、おもしろいぢや。

讀人しらす

こめやとは思ふものから日くらしのなく夕暮はたちまたれつ

「こめや」は来らんや、は決して来らじといふ意。日ぐらしの聲を聞く時は何となく人の戀しくなつかしく思はれること前にも申すとほりぢや。○何として来るものかとは思ひながらも、日ぐらしが鳴く夕暮時となれば戀しくなつかしさにたへられなくても、しやと立いで、待たれる事よ。

今しはと侘びにしものをさゝかにの衣にかゝり我をたのむる

「今しは」のしは強めの助辭で、今はといふを強めていふ。即ち今は決して来るまいといふ意ぢや。侘びはこゝでは落膽の意にいふ。さゝがには蜘蛛のこと。蜘蛛は形蟹に似たれば、笹蟹の義ぢやといふ。蜘蛛が衣にかゝれば親しき人が至

る由の証が有て、是は支那にもいふ事である、此歌はそれに依つたのぢや、たのむるは、たのまするでます、が約束つてむとなつたぢや、○今はもはや決して来るまいと、落膽してしまつたものを、さゝ蟹の蜘蛛がわしが衣に糸を引かけて、何となく頼もしく思はせるよはて蜘蛛が衣にかゝれば思ふ人が来るといふからせ

今はこじと思ふものから忘れつゝ待るゝ事のまだもやまぬか

もはや今は来まいと思ひながら、ツイそれをば忘れては、とかくに待たれる事が今日までもまだやまない事よ、

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなむ佗びつゝもねむ

月の清い晩は、前の蜘蛛の聲をきいた時のやうに、何となく人の戀しくなつかしく思はれるものぢや、戀しくなつかしく思ふからには、アゝかゝる時人に逢うて相語らうたならばと思はれるそれが即ち待たれるぢや、来ぬものと思ひ定めながら、我が戀ふる情よりして、しひてもしもと待るゝぢや、○月の清

い夜は、来ぬものと思ひ定めた人も、我が情からしてとかくに待たれてならぬ、むしる空がかきくもつて、雨が降るやうにもしたい事ぢや、さらばつらくつまらず思ひながらもねてしまはうものを、

植ゑていにし秋田かるまでみえこねばけさ初雁のねにぞなきぬる

初二句は、植ゑて去にし苗の實のりて刈る迄といふので、秋田をうるたといふではない、けさ初雁は、ねにぞなきぬるの枕で秋田かるといふ詞に依て、時節のものを枕としたぢや、○植ゑて行かれた苗は生長して、秋田の稻となり、それが實のりて刈り入れるに至るまでも、更に見え来ぬからして戀しうてたまらず、今朝渡つてきた初雁のやうに、サ、わしもねになく事ぢや、

こぬ人をまつ夕暮の秋風はいかにふけばか佗しかるらむ

○来もせぬ人をもしや来るかと待ちて居る夕暮方の秋の風は、どう吹く故に、かほどまでに淋しくつまらぬ心地がするであらう、

久しくもなりにける哉住の江のまつは苦しき物にぞありける

「我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらんといふは此集の雜
 上じやうでよみ人ひとしらすの歌うたぢやが 此歌このうたからして住の江の江の松の松には久ひさしいといふ
 をよむ事ことで即すなはち此歌このうたや次の歌うたもそれである 古來こらいの注しゆに此本歌このほんかの事ことをい
 れないは不ふ十分じふぶんぢや 借右せうの歌うたに依よつて久ひさしくもなりにける哉いかというて住の
 江の江を待まちつの枕まくらにおいて、松の松の年とし経へたと待まちつ事ことの久ひさしいとにかけたぢや ○さ
 てもく久ひさしうなつた事ことぢやわいな、わの住の江の江の松の松ではない來こない人ひとを待
 つといふは借せ々さくるしくせつないものであるわい、

かねみのおほきみ

住の江のまつほど久になりぬればあしたづのねになかぬ日は
 なし

これも住の江の江あしたづは共に枕まくらぢやが相類あひなしたものを枕まくらとして猶なほ久ひさしいと
 いふ松の松の縁語えんごをも入れたのぢや ○住の江の江の松の松イヤ人をまつ程ほど合あが久ひさしく
 なつたに依よつて、其松の松に鳴なくあしたづの音ねではないがわしも聲こゑにあらはしてな
 かない日ひとしてはな

なかみらの朝臣あそのあひしりて侍りけるをかれがたになり
 ければちゝがやまとのかみに侍りけるもとへまかるとてよ
 みてつかはしける

伊勢

みわの山の山いかにまぢみむ年としふとも尋たずぬる人もあらじと思へば
 これも此集このしゆ雜下ざのげよみ人ひとしらすの歌うたに、我宿わやどは三輪の三輪の山の山本戀ほんこひしくはとふらひ來
 ませ杉の杉たてる門かどとあるによつてよむだもので 三輪の三輪は大和ので詞書ことばがきにある通
 り大和國のへゆくに依よつて三輪山の三輪山といふのぢや ○三輪山の三輪山には戀こひしくはとひ來
 よといふ詞ことばもあるがわしが身みではどうして待まちつて逢あはれるやらの事ことがあら
 うぞや いかにもそこに長ながくの年とし月つきを過すとも尋たずねて來こるやうな人ひとはあるま
 いと思おもひますからさ、

題しらず

雲林院のみこ

吹迷ふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の
 上の句うへはうつりもゆくかの序まで例れいの世間よの評判ひやうはんを厭いとふといふやうな意いがお
 のづからしられるのぢや うつるは變へんずるで人の心こゝろがかはりゆくをいふ

○あゝも吹きかすも吹き色々に吹き廻す野風が寒いので秋萩の花がうつり
變じてゆくやうにうつりかはつてゆく事かいナあの人の心が、

をのゝこまち

今はとて我身時雨にふりぬればことの葉さへにうつろひにけり

○もういかぬとてわしが身が時雨のやうにふるされ捨てられるやうになれ
ば約束しておいた言葉さへもうつろひ變ずる事でありますわい、といふので
時雨といふから紅葉の色うつろふとかけて言の葉のうつろふといふた
ぢや、

かへし

小野、さだき

人を思ふ心この葉にあらばこそ風のまにくちりも亂れぬ

○人を思ふ心がもしも木の葉で有る事ならばこそ風が吹くに從つて散り亂
れるといふ事もあらうけれど、わしが君を思ふ心は木の葉ではないから風が
吹いても亂れない

なりひらの朝臣きのありつねがむすめにすみけるをうらむ
ることありてしばしのあひだひるはきてゆふさはかへり
のみしければよみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるもの
から

「あま雲のはよそといふにかゝる枕 さて目にもゆといふを雲にもかけてい
うたちや 元來あまぐもといふには天雲と雨雲との差別があるが枕詞に用
ふるは天雲の方で天の意はうすく専ら雲といふ程の意ぢや ○空を行く雲
のやうによそくしく疎くマアあなたは成つて行きなざる事かいな しか
しながら全く來ぬでもなく、我の程は目には見える物ぢやのに、さてくどう
したものぢややら

なりひらの朝臣

ゆきかへり空にのみしてふることはわがゐる山の風はやみな
り

かけ歌のあま雲をうけてやがて自身を雲として雲の上よりいふ故に雲とは
 わざといはず調べおろしたのぢや「ゆきかへりといひ 空、わがゐる山、
 風はやみ、皆雲についていふ」ゆきかへりは晝の程の往復「空は空しく往復
 するのみで宿らぬをいふ」わがゐる山は雲自身が居る山といふので、即ち自
 身が住む女の家ぢや「風はやみ」は風が早くて、即ち女の我を待つゝの戀なら
 ざるをいふ 是は實際はさやうの事は無い事も歌の上で始くからかつてか
 やうにいひなすが、贈答の歌の常ぢや 俗此ふることとはの詞を雨雲の縁語と
 いふ説があるが、それはよろしくない もとより此歌にはあま雲といふ詞も
 なく、又かけ歌のは前にいふ通り天雲で雨雲ではない、かたゝく是は取られな
 い ○天雲の往たり來たり、むだいたづらにはかりして日をおくるといふこ
 とはつまり雲自身落付き居るべき山の風が烈しくて居たゝまれぬ故であ
 る、

題しらず

かけのりのおほきみ

唐衣なれば身にこそまつはれめかけてのみやはこひむと思ひ

し

「からころもは馴れといふ枕 さて此枕の唐衣の縁語で調べおろしたのぢや
 「なればは馴れなばで馴れたならばぢや 衣服は着馴せば和らかにまつて
 身に引付きまつはるものぢや 人も馴れ親しめば互に相近づき慕ひかはす
 ものぢやから、それにかけたぢや」かけてのみは、かけはこゝからかしこへか
 けるをいふ、我心をかしこの人にかけるぢや 即ち一所に住めばかける事は
 ないが、一所に住む事が出来ぬからかけるのぢや 是も衣の縁語、衣はかける
 ものぢやからである ○唐衣の馴れた事ならば身に親しく引付き相纏はる
 であらうと思ふたが、さうでなく、身にはまつはらんで、かけてばかり戀しがら
 うとは何としてか思はう、

とも のり

秋風は身を分てしも吹かなくに人の心の空になるらむ

是は初秋の頭人の心の變じたに依てやがて秋風によせてよんだもので心の
 空になるとは不實になるをいふので心が變ずるのぢや ○秋の風は誰れ彼

れと人の身に差別を立て、吹くものでもないのに、何として人の心はうはの空即ち不實に變じた事であらう、わしは變りもせぬのにといふので、身を分けてしもは、人と我との身を分けてしもの意ぢや、此歌古來の諸注すべて説き得ないからだを分けて腹の中へ吹ては入らじなどさへ説き木の葉のやうに空にちるなどいふに至るが、さやうにむつかしい事ではない、右のやうに見て事もなく解せられる歌ぢや、

源、宗于、朝臣

つれもなくなりゆく人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける
言の葉といふから、やがてそれを木の葉になぞらへ、かねて言うた詞がかはるを紅葉の色に變ずるによそへて、秋よりさきの紅葉といふのぢや、○同情がなくなつて行く人の言の葉は、秋より最初の紅葉であるわい、ハテ木の葉は秋に成て色が變るが人の言葉は秋をもまたんで變るからぢや、
こゝちそこなへりけるころあひしりて侍りける人とはて
こゝちおこたりて後とぶらへりければよみてつかはしける

兵衛

しての山麓を見てぞ歸りにしつらき人よりまづこえじとて
死出の山は黄泉の道路として古來死ぬる事を死出の山を越ゆといひ來つてある、麓を見て歸るは殆んど死なんとしてたすかつたので、死にはづれにあらたのぢや、つらき人は病氣の時音信なかりしによりていふ、もとより戯れにからかひていふので、君よりさきに越えては御無禮ぢやからの意である、○わたしは死出の山の麓まで行つてそこを見てサ歸つて來ました、といふは實のないつらい心のあるお人より、最初に越えては御無禮であるから、と申しての事であります、
あひしりける人のやうやくかれがたになりけるあひだに
やけたる茅の葉にふみさしてつかはせりける
こまぢがあね

「やけたる茅の葉とは、野を焼きたる時に、やけ残つた茅の葉といふ事ぢや、茅は

淺茅ぢや、

時過ぎて枯行く小野の淺茅には今は思ひぞたえずもえける

是は比喩ぢや 時過ぎては淺茅の葉の萎々たる盛の時節を過ぎるといふに、
我色の衰へるをよせたぢや 「枯行くは冬枯に人の來らずなるをかけたぢや
小野は即ちわが姓をよせたもの 思ひもゆるといふに火を掛けそこで茅の
葉のやけ残りを示したのぢや ○時節が過ぎて冬枯れて行く小野の淺茅の
やうに色が衰へて人がかれて行く此小野のわたしは今日では物思ひといふ
火が常に絶えずもえてをる事であり升わいこれに御覽なさい此通りやけて
ゐます)

ものおもひける頃ものへまかりける道に野火のもえけるを
みてよめる

野火は野をやく火の事ぢや

冬枯の野べとわが身を思ひせばもえても春を待たまし物を

いせ

人が離れて來たらすなつたを始く冬枯の野に思ひよせて惜いひなしたので
思ひせばはそれとしたならばといふ程の意ぢや ○人はわしがところを離
れはてたがもしも冬枯の野べぢやとわしが身ををした事ならば たへ思ひ
の火にもえたとしたところが春を待て又茅の出る事もあるべきであるが野
でないわしが身はもはや茅の出るといふ事はなく只空しく思ひにもえるば
かりぢや)

題しらず

とものり

水の泡のきえてうき身といひながら流れて猶も頼まるゝかな

「水の泡のきえてうき身の枕詞」きえてうき身は死なんばかりに愛き身と
いふ事 「流れてはながらへての意」 枕詞の縁語で流れてといふ ○水の泡
は消えては又うきものぢやが其消え入らんばかりに愛く難儀な身ではある
けれども消え入りもはてず流れながらへて(かうばかりでもあるまいと)やは
り末に頼みをかけて居ますかいナ

よみ人しらず